

# 『大梵天王問仏決疑経』をめぐつて

石井修道

禅宗では、「正法眼藏」が仏教を開いた釈尊から摩訶迦葉にのみ伝えられたと伝承している。その重要な伝法時の話として、「拈華微笑」の話がよく知られ、例えば『無門関』の第六則では、次のように伝えている。

世尊、昔、靈山会上に在つて花を拈じて衆に示す。是の時、衆皆な默然たり。惟だ迦葉尊者のみ破顔微笑す。世尊云く、「吾に正法眼藏、涅槃妙心、実相無相、微妙の法門有り。不立文字、教外別伝、摩訶迦葉に付嘱す。」

世尊昔在靈山会上拈花示衆。是時衆皆默然。惟迦葉尊者、破顔微笑。世尊云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙法門。不立文字、教外別伝、付嘱摩訶迦葉。（西村惠信訳注岩波文庫本四三頁）。

この話の出典は、必ずといつてよいほど、偽經の『大梵天王問仏決疑経』（以下『問仏決疑経』と略称す）であると一般に指摘されている。この偽經は、現在、二巻本と一巻本の二本があり、ともに続蔵經に収められているが、確かに、両書には、次のように拈華微笑の話が存在するのである。

新たに問題提起をし、今回の問題に必然的に関連することも指摘しておいた。ここでは、それを踏まえて、現段階における『大梵天王問仏決疑経』の問題を整理しておきたい。

まず、「拈華微笑の話の成立をめぐつて」の論点をまとめておくことにしよう。

## 二卷本『問仏決疑經』初会法付嘱品第一

爾時大梵天王、即引若干眷屬來、奉獻世尊於○○羅華、各各頂禮仏足、退坐一面。爾時世尊即拈奉獻○色婆羅華、瞬目揚眉、示諸大衆。是時大衆默然毋措。

□有迦葉○破顏微笑。世尊言、有我正法眼藏、涅槃妙心、即付囑于汝。汝能護持、相續不斷。時迦葉奉仏勅、頂禮仏足退。

爾の時、大梵天王は、即ち若干の眷屬を引き來り、世尊に金婆羅華を奉獻し、各各仏足を頂礼し、一面に退坐す。爾の時、世尊は即ち奉獻せる金色の婆羅華を拈じて、瞬目揚眉して、諸の大衆に示す。是の時、大衆は默然として措くこと母し。時に独り迦葉尊者のみ有りて破顔微笑す。世尊言く、「我れに正法眼藏、涅槃妙心有りて、即ち汝に付囑す。汝能く護持して、相続して断ぜざらしめよ」。時に迦葉は仏の勅を奉じて、仏足を頂礼して退く。（續藏一編八七套四冊三〇三丁左上）（推測文字ノ「獨」ハ「唯」トモ考エラレル）

## 一卷本『問仏決疑經』拈華品第二

(a) 爾時娑婆世界主大梵王、名曰方廣。以三千大千世界成就之根、妙法蓮光明大婆羅華、捧之上仏、退以作禮。而白仏言、世尊今仏、已成正覺、五十年來、種種說法、種種教示、化度一切機類衆生。若有未說最上大法、為我及末世行菩薩人、欲行仏道凡夫衆生、布演宣說。作是言已、捨身成座、莊嚴天衣、令坐如來。爾時如來、坐此寶座、受此蓮華、無說無言。但拈蓮華、

入大会中八万四千人天。時大衆皆止默然。於時長老摩訶迦葉、見仏拈華示衆仏事、即今廓然破顔微笑。仏即告言是也。我有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙法門、不立文字、教外別傳、總持任持、凡夫成仏、第一義諦、今方付屬摩訶迦葉。言已默然。爾時尊者摩訶迦葉、即從座起、頂禮仏足。

爾の時、娑婆世界主の大梵王、名づけて方廣と曰う。三千大千世界の成就の根の妙法蓮光明大婆羅華を以て、之れを捧じて仏に上りて、退くに礼を作すを以てす。而して仏に白して言く、「世尊今仏、已に正覺を成す、五十年より來た、種種に說法し、種種に教示し、一切の機類の衆生を化度す。若し未だ最上の大法を説かざること有らば、我れ及び末世の菩薩を行ずる人、仏道を行せんと欲する凡夫衆生の為に、布演宣説したまえ」。是の言を作し已りて、身を捨てて座を成し、天衣を莊嚴し、如來を坐らしむ。爾の時、如來、此の宝座に坐り、此の蓮華を受け、無說無言なり。但だ蓮華を拈じて、大会の中の八万四千の人天に入る。時に大衆皆な止だ默然たるのみ。時に長老摩訶迦葉は、仏の華を拈じて衆に仏事を示すを見て、即今に廓然として破顔微笑す。仏即ち言を告ぐ是なり。「我に正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙法門有り、不立文字、教外別傳して、總持任持せば、凡夫の成仏にして、第一義諦なり。今ま方に摩訶迦葉に付属せり」。言い已りて默然たり。爾の時、尊者摩訶迦葉は、即ち座より起ち、仏足を頂礼せり。（同三二六

丁左上

(b) 爾時大梵天王白仏言、世尊出世、四十余年、種種説法。云何有未曾有法耶。云何有及言語法耶。願為世間一切人天、能示己自。言了金色千葉大婆羅華、持以上仏、而退捨身、以為床座、真誠念願。

爾時世尊著坐其座、廓然拈華。時衆會中百万人天、及諸比丘、悉皆默然。時於會中、唯有尊者摩訶迦葉、即見其示、破顏微笑。從座而起、合掌正立、有氣無言。爾時仏告摩訶迦葉言、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙法、不立文字、教外別伝、有智無智、得因縁証。今日付屬摩訶迦葉。摩訶迦葉、未來世中、奉事諸仏、當得成仏。今日亦堪為世間師。

爾の時、大梵天王は仏に白して言く、「世尊の出世は、四十余年にして、種種に説法せり。云何が未曾有の法有らんや。云何が言語の法に及ぶ有らんや。願くは世間の一切の人天の為に、能く自己に示さんことを」。言ひ了りて金色の千葉の大婆羅華をもて、持して以て仏に上り、而して退いて身を捨てて、以て床座と為し、真誠に念願す。

爾の時、世尊は其の座に著坐し、廓然として華を拈ず。時に衆会の中の百万の人天、及び諸の比丘は、悉く皆な默然たり。時に会中に、唯だ尊者摩訶迦葉のみ有り、即ち其の示すを見て、破顔微笑す。座より起ちて、合掌して正立し、氣有るも言無し。爾の時、仏は摩訶迦葉に告げて言く、「吾に正法眼藏、涅槃妙

心、實相無相、微妙の法有り、不立文字、教外別伝して、有智も無智も、因縁の証を得たり。今日、摩訶迦葉に付属す。摩訶迦葉、未来世の中に、諸仏に奉事し、當に成仏を得べし。今日も亦た世間師と為すに堪えたり」。(同三三七丁右下左上)  
このように、拈華微笑の話が『問仏決疑經』に存在する以上、それに基づいて拈華微笑の話が成立したとされるのも理由があつたのである。そしてその根拠には必ず次の晦厳智昭の『人天眼目』卷五(一一八八年成立)の「宗門雜錄」所収の拈華微笑の話の記事と共に理解されてきたのである。

王荊公問仏慧泉禪師云、禪家所謂世尊拈花、出在何典。泉云、藏經亦不載。公曰、余頃在翰苑、偶見大梵天王問仏決疑經三卷。因閱之、經文所載甚詳。梵王至靈山、以金色波羅花獻仏。舍身為床座。請仏為衆生説法。世尊登座拈花示衆。人天百万、悉皆罔措。独有金色頭陀、破顏微笑。世尊云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、分付摩訶大迦葉。此經多談帝王事仏請問。所以秘藏世無聞者。

〔王荊公、仏慧泉禪師に問うて云く、「禪家の所謂る世尊の拈花、何の典に出づるや」。泉云く、「藏經に亦た載せず」。公曰く、「余頃この翰苑に在りて、偶たま『大梵天王問仏決疑經』三卷を見る。因みに之れを閲するに、經文に載する所甚だ詳し。梵王、靈山に至りて、金色の波羅花を以て仏に獻ず。身を捨てて床座と為し、仏に衆生の為に説法せんことを請う。世尊は座

に登りて花を拈じて衆に示す。人天の百万、悉く皆な措くこと罔し。独り金色の頭陀のみ有りて、破顔微笑す。世尊云く、「吾に正法眼藏、涅槃妙心、実相無相有り、摩訶大迦葉に分付す」。此の經は多く帝王の仏に事えて請問するを談ず。所以に秘藏して世に聞く者無し（大正藏四八卷、三二五頁中）。

筆者は『無門関』の出典は、『問仏決疑經』ではないと断言する。出典は間違いなく禅宗の燈史の一つである次の『宗門統要集』卷一「釈迦文仏章」（一〇九三年）であることを主張したのである。<sup>(3)</sup> さらにもともと「拈華微笑」の話が燈史の中でどのような成立過程を経て来たかについても検討し、ほぼ『景德伝燈錄』（一〇〇四年）から『天聖広燈錄』（一〇三六年）の間に成立し、特に臨済宗の禅者によつて伝承されていることを確認しておいたのである。<sup>(4)</sup>

（a）世尊昔在靈山会上、拈花示衆。是時衆皆默然。唯迦葉尊者、破顔微笑。世尊云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、

微妙法門、不立文字、教外別伝、付嘱摩訶迦葉。

海会端云、迦葉善觀風雲別氣色。雖然如是、還覺頂門重麼。黃

龍心云、直下穿過觸體、已是換却眼睛。臨危不在悚人、向甚處見釈迦老子。

（b）世尊昔至多子塔前、命摩訶迦葉分座令坐、以僧伽梨囬之。遂告云、吾以正法眼藏、密付於汝。汝當護持、伝付将来、無令斷絕。（宋版一六丁左、七丁右）

このことを確認すると、新たな問題が生まれてくる。現存の二種の偽經の『問仏決疑經』をめぐつては、江戸期より日本撰述説と中国撰述説があり、その結論を得てはいない。ここに、これらの主張の経過と問題点を検討する必要があろう。特に、二種の偽經の内容、中でも一巻本の内容を細かに検討する必要があり、従来、この二種の偽經の関係を論じた専論を寡聞にして知らないし、今までの研究成果から判断して、多くの問題を残していると考えられるのである。ただ、周知のごとく、面山瑞方（一六八三—一七六九）・諦忍律師妙龍（一七〇五—一七八五）等の江戸時代の日本撰述の偽經説を承けて展開する、二巻本の本格的な論文である忽滑谷快天（一八六七—一九三四）氏の「大梵天王問仏決疑經に就て」（『禅学批判論 附録』、鴻盟社、一九〇五年一月一三日）の説があり、最重要課題はその結論が正しいかどうかということが問題となろう。

## 二、二巻本『大梵天王問仏決疑經』の構成と内容の要旨

先に言うように、『問仏決疑經』は、現在、二巻本と一巻本の二本が続蔵經卷八七に收められている。先ず二巻本の構成と内容の要旨を見てみよう。その場合、二巻本の性格を推測するには、次の無著の貴重な十の「凡例」が存在する。

①一、斯經全軸二十四品。品名開于後。軸今成両本。

一、斯の經は全軸二十四品なり。品名は後に開く。軸は今ま

両本と成る。

②一、斯經三百有年来、秘于某寺經函。故文字多為蠹魚蝕者。圈<sub>字</sub>充之。間有紙業脫者、可歎惜矣。

一、斯の經は三百有年より來た、某寺の經函に秘す。故に文字は多く蠹魚<sub>しみ</sub>の為に蝕<sub>むしば</sub>まれる。圈いの字をもて之を充つ。間に紙葉の脱すること有るは、歎惜すべし。

③一、斯經出處、不敢分明說。蓋付予人、以秘藏故、深誠說來歴。讀人母加穿鑿。

一、斯の經の出處は、分明に説くを敢えてせず。蓋し予に付する人の秘藏するを以ての故に、深く來歴を説くを誠む。読む人は穿鑿を加えること母<sub>な</sub>かれ。

④一、斯經震旦秘之御府、不許流通。故見者最希。本邦幸有此本者、实國家之宝也。專賴有力弘通。誠知王荆公宋景濂語不虛也哉。

一、斯の經は震旦<sub>まきだん</sub>にて之を御府に秘して流通を許さず。故に見る者最も希<sub>まれ</sub>なり。本邦に幸いに此の本有るは、實に國家の宝なり。専ら有力に弘通を頼む。誠に王荆公、宋景濂の語の虚しからざるを知らんや。

⑤一、斯經伝写、失訳人之名。莫怪之。

一、斯の經の伝写、訳人の名を失す。之を怪しむこと莫かれ。

⑥一、斯經請益品一篇、文相句義、与涅槃經同。但有中間处处、文字增添耳。然字蝕最甚。依涅槃經全文、則理顯著矣。

一、斯の經の請益品の一篇の、文相句義は『涅槃經』と同じ。但だ中間の处处に文字の増添有るのみ。然るに字の蝕<sub>むしば</sub>みは最も甚だし。『涅槃經』の全文に依らば、則ち理は顯著せん。

⑦一、斯經梵王於涅槃會上別發問、如來為之重說。故文身句体、与涅槃經大同小異。

一、斯の經は、梵王の涅槃會上にて別に發問し、如來之が為に重ねて説く。故に文身句体は、『涅槃經』と大同小異なり。

⑧一、斯經予深秘五十年于茲、時逢聖明、今正流布。竊意、五百年之嘉運者乎。見聞諸師、伏冀隨喜流通。

一、斯の經は、予深く五十年茲に秘す。時に聖明に逢い、今まで正に流布せんとす。竊<sub>ひそか</sub>に<sub>おも</sub>意う、五百年の嘉運なる者か。見聞の諸師、伏して冀くは隨喜流通せんことを。

⑨一、斯經始終、為台賢二師別頓判看。至心熟讀、則經旨精通無遺。

一、斯の經の始終は、台・賢の二師の別・頓の判看を為す。至心に熟讀すれば、則ち經旨精通して遺<sub>のこ</sub>す無し。

⑩一、世說我國台嶺慈覺大師曾自大唐抄來斯經、在于某國某寺。欲親討校正、老矣所不能也。暫俟後賢。

一、世に我が國の台嶺の慈覺大師の曾て大唐より斯の經を抄來して某國某寺に在ると説く。親しく校正を<sub>もと</sub>討むと欲するも、

老にして能わざる所なり。暫く後賢を俟たん。

無著謹誌（無著謹んで誌す）。

無著とは、詳伝は不明であるが、後に紹介する「識語」を書いた無著靈光のことで、それによつて知られる事項はそこで検討することにしよう。この「凡例」から見ても、内容的に疑問があつて伝承していたことが窺われる。次に「大梵天王問仏決疑経目録」が示される。

### 卷上

- 初会法付囑品第一
- 梵王決疑品第二
- 梵王悟密意品第三
- 比丘得道品第四
- 諸王得益品第五
- 諸国安靜品第六
- 仏告般涅槃品第七
- 正像末法品第八
- 略説邪正戒品第九
- 弁邪正品第十
- 諸法實相品第十一
- 禪定品第十二
- 涅槃品第十三

如來病現品第十四  
生死品第十五

梵王請益外道品第十六  
劫末說法真偽品第十七

略說三寶品第十八  
真如□□品第十九

仏名義品第二十  
降魔品第二十一  
業識品第二十二

囑累品第二十三  
四衆誓願品第二十四

各品の内容を簡単に示せば次のようになる。

### 卷上

- 初会法付囑品第一
- 拈華微笑の話を説く。
- 梵王決疑品第二
- 大梵天王が前の『法華經』の諸法実相、悉皆授記作仏の説に対する、今の拈華の義趣の心疑の決断を願う。諸仏の密意は言辞を以て測度すべからざること。摩訶迦葉には、多子塔前にて半座を分かち、久遠成仏することを明かす。
- 梵王悟密意品第三

密意とは、一切修多羅の心体であること。正法眼藏は、決して二語無いこと。

#### 比丘得道品第四

塵塵刹刹が密意三昧であるとし、以下に密意三昧を五三句ほど挙げて、諸説秘密真言、一切修多羅、一切魔外の立法等は、悉く皆な密意三昧の異説異称であることを認める。

#### 諸王得益品第五

世尊が迦葉に付囑した正法眼藏涅槃妙心は、諸仏の密意であり、諸仏の心印であり、諸仏の修多羅教の究竟の実法であることを、十六大国王や無量の小国王が今日始めて識得したことを述べる。

#### 諸国安靜品第六

護国護法の義を説き、正法眼藏が正しければ安國であり、正法眼藏が正しからざれば國が乱れることをいう。

#### 仏告般涅槃品第七

涅槃の旨趣を説き、我れは常に靈山に在り、不在の時の無いことをいう。

#### 正像末法品第八

諸仏の妙法は常住にして古今の盛衰の相あること無しといふ。權實偏円の隨機方便あることをいう。

#### 略説邪正戒品第九

戒は内外にあらず、即ち無漏性戒なり。この戒に外れるの

は、邪戒である。

#### 弁邪正□品第十

外道の六十四能や十八惑人呪術の邪法に対し、仏説の四波羅夷・十三僧残・二不定法・三十捨墮・九十一墮法・四饑法・衆多□法・七滅□などが説かれる。一切衆生は仏性を有つと雖も、要す持戒に囚り、然後に仏性を見て、正覺を成するをいう。

#### 諸法實相品第十一

地獄餓鬼乃至仏界苦樂相は即ち眞実相とし、諸種の如來の眞実相が説かれる。思慮を絶する処を思慮することを、圓極頓大の法とし、大機の迦葉の如きものが、頓に仏旨を領するをいう。

#### 禪定品第十二

三昧禪定は實に六塵法に住せず、六塵を外れず、生死去來は共に禪定であるをいう。

#### 涅槃品第十三

涅槃とは無住處であるとし、諸の涅槃説が説かれ、仏性顯露することが大涅槃法であり、これが身心の実相といふ。

#### 如來病現品第十四

衆生と諸仏は無二であり、生死と涅槃は無二である。涅槃は常住法身、如如仏性といふ。ここに『大梵天王問仏決疑經』の別名として、『梵天所問伝法經』『付法正法眼藏涅槃妙心經』

が示される。梵王は誓つてこの経を奉持し、此れを末世に伝付せんとする。今までの法運は天地と其の寿を等しくし、此の報恩の事を為さんことを誓う。

**生死品第十五**  
生死は如來の義であり、如來は衆生の謂という。生は顯の義であり、死は密の義である。生也全機現、死也全機現ともいう。

**梵王請益外道品第十六**

サーンキヤ学派（數論）の劫毘羅（Kapila）の一十五諦説、ヴァイシエーシカ学派（勝論）の喩露迦（Uluka）の苗裔の十句義説を説く。その後は文字不明で解読不能が続く。この品の終わりに仏の最後の遺教として仏説と魔説の相違を述べているが、その相違の内容は欠文の為に不明である。

**卷下****劫末説法真偽品第十七**

正眼の人でなければ、劫末の説法は識得しがたい。密機に對しては密説を説き、顯機に対しては顯説を説く。如來の密義の正法は、魔外の知る所ではない。國王の法眼が正しければ、魔外に惑乱されることはなく、國王の法眼が正しからざれば、魔外に惑乱される。梵王等は護國護法の願いを起こして、正法を滅尽させないようにしなければならない。

**略説三寶品第十八**

同体三宝は、各おの具する仏性であり、仏性靈覺が仏宝、仏性本寂が法宝、仏性無諍が僧宝という。別体三宝は、泥塑木像等が仏宝、あらゆる修多羅が法宝、著衣正戒が僧宝といつてある。一般に前者は一体三宝ともいい、後者は住持三宝とも言つてある。同・別は二と雖も、無辺法界の三宝を知るべきといふ。

**真如□□品第十九**

真如法性的その実は、色心二法であり、名は異なるも体は一である。真如は不可思議の自性で、一法界の相である。一切の諸仏の顯・密の説は、不可説の可説であり、真如法性理事の言は、不可名の強名であるといふ。

**仏名義品第二十**

梵王が仏の名義を問うた時、世尊は微笑默坐された。この微笑默坐こそ諸仏最上の如如真仏とする。諸仏の名義は因果不二の仏性であり、それが如如真仏の名義である。如來三身相は即ち因果不二法の仏である。いわゆる法とは、本より智でないならば、曾て愚と説かず。同様な繰り返しが続いて寂滅法にあらざれば、曾て至靜の法を説かず。是の如き法は心是れなり。是の如き法は身身是れなり。取るべからず、捨つるべき無し。諸の比類を出づるが故なり。見聞覺知せざるが故なり。是の如き直説は、遂て二語無きなり。一切の諸仏の修多羅は、一言に説き尽すなり。一切の修多羅藏は、能く

一言に統収するなり。思うべからず、知るべからず。是の故に拈華の旨は、是を以て知らん。夫れ諸仏最後の法義は、皆な是の如きなり。

### 降魔品第二十一

降魔したいと思うならば、汝等の心魔を降さねばならない。心魔とは降魔する思慮をもつことであり、正思惟は降魔である。心外に仏を求むれば、魔という仏が現来する。もし心魔を降せば、則ち一切の外魔は皆な悉く帰降して即ち左右に侍するなり。心魔とは二辺の心なり。

### 業識品第二十二

一切法の見聞等は、悉く皆な業識にして、自ら妄想せり。此の自らの妄想を除くの外に仏性有ること無し。業識の相貌を見たいと欲せば、須らく衆生の無常相を見るべし。諸仏の相好を見んと欲せば、當に業識の自性を見るべし。いわゆる業とは、仏性自体の業なり。識とは、仏性自体の識なり。然れば則ち仏性の業と識とは、一性の二名なり。諸仏の應世身と衆生の流転身とは各おの別なりと雖も、共に一仏性の異称なり。即ち是れ業識身なり。更に生仏不二が繰り返し説かれる。今ま此の経は一切修多羅經の骨髓なり、その一切の修多羅は此の経の皮膚なり。

### 囑累品第二十三

迦葉に付囑した密法は、諸仏の甚深の究竟の正法なり。すべ

ての血氣有る者は各おの具せざるはなし。迦葉は声聞ではあるが、密法は毘婆尸仏より釈迦牟尼仏に付法された正法眼蔵涅槃妙心である。然るに劫末の衆生は其の信が劣なるが故に、所以に衣を迦葉に授けて、以て法の付続の証と為すのである。その後に梵王に後後の仏が出世した時に般涅槃に臨んで迦葉と同じくこの会のように発問せよと付囑し、それを梵王は世尊の勅として承知するのである。

### 四衆誓願品第二十四

如來の修多羅藏は決して滅尽すべからず。世尊の説法を聞いて在会の百万億の人々が各々無上乗法眼淨藏を獲得し、諸天等も無上乗法眼淨を得て、正法藏を護持することを誓願し、退席する大梵天王も諸眷属と共に如來が正法藏を付囑したことを心に銘み護念して、各々仏足を頂礼し、信受奉行することで終わる。

以上の二四品を終えて、「大梵天王問仏決疑經卷下へ大尾」に続き、続蔵經本には、「識語」が存し、その伝承が記されていて興味深く、次のように示されている。

①茲時、享保十二丁未仲夏吉祥日。

陸奥州南部花巻玉鳳山瑞興寺十八世隱野衲無著靈光持書（時

七十八歳）

（茲の時、享保十二丁未（一七二七）仲夏吉祥の日。

「時に七十八歳なり」

②右大梵天王問仏決疑經（全軸分為二本）、東奥南部洞上老隱無著光師五十年間所秘珍也。親附凡例、具陳來由（乃載卷首）。今茲偶獲転写之本、感喜無措。手謄写焉。時享保庚戌解制日、謹書。

或曰、相伝、斯經本邦三所珍藏。其一奥州平泉光堂（秀衡廟所。經堂今存）、其二濃州郡上長瀧（天台古刹）、其三摶州水田三宝寺（能忍旧跡。今作洞宗）也。未詳斯經存不。按洞老之所伝写者、正是光堂經本也耳。更可希求者、郡上台刹（号阿名寺）。

彼納宋朝渡来之名藏二部、近來刊行珍書、多出斯藏。因思斯經

亦存不可測矣（斯藏非守護金森許容、不能輒窺）。我老不能搜

求。後來有台緣者、上稟天台門主、及依憑學頭僧正、而須拝閱

校整焉。

東叔老禪、写本之末置此一紙。

（右、『大梵天王問仏決疑經』（全軸分かちて二本と為す）は、東奥南部洞上老隱無著光師の五十年間秘珍する所なり。親しく凡例を附して、具さに來由を陳ぶ（乃ち巻首に載するなり）。今茲に偶たま（こゝなま）転写の本を獲て、感喜すること措くこと無し。手づから焉を謄写す。時に享保庚戌（一七三〇）解制の日、謹んで書す。

或が曰く、相い伝う、斯の經は本邦の三所に珍藏せり、と。其の一は奥州平泉の光堂（秀衡の廟所なり。經堂今に存す）、其の二は濃州郡上（くじょうひかり）の長瀧（天台の古刹なり）、其の三は摶州水田（すいたすいた）の寺院で花巻市坂本町に現存するが、火災の為に寺宝は焼失の三宝寺（能忍の旧跡なり。今は洞宗と作る）なり。未だ斯の經の存するや（いな）を詳かにせず。洞老の伝写する所を按すれば、正に是れ光堂の經本なるのみ。更に希求すべきは、郡上の台刹（阿名寺と号す）なり。後に宋朝渡来の名藏二部を納め、近來刊行の珍書は、多く斯の藏より出ず。因て斯の經を思えば亦た存すること測るべからざるなり（斯の藏は守護の金森の許容に非ざれば、輒く窺うこと能はず）。我老にして捜求すること能わず。後來に台の縁有る者は、上は天台門主を稟け、及び學頭僧正に依憑して、須らく拝閱校整すべし。

東叔老禪、写本の末に此の一紙を置く。

③享保十七年子之二月、実海的座元持此本而詣郡上長瀧寺、依憑阿名院教聞坊、大仁坊、神主斎等而開經藏、委悉拝閱、終無斯經矣。

（享保十七年子（一七三二）の二月、実海的座元は此の本を持ちて郡上の長瀧寺に詣して阿名院の教聞坊、大仁坊、神主斎等に依憑して經藏を開き、委悉拝閱するも、終に斯の經無し）。

これらの「識語」より、統藏經の底本になつた写本は、享

保一年（一七三〇）に東叔老禪の書写によるものであることが知られる。更にその原本は享保一二年（一七二七）に七八歳の無著靈光（一六五〇—一七二七？）が書写したもので、「凡例」もこの人の手になるものである。瑞光寺は曹洞宗の寺院で花巻市坂本町に現存するが、火災の為に寺宝は焼失

して残つていないとのことであり、無著靈光なる人が一八世に当たるという記録も存在しないとのことである。<sup>(5)</sup> 東叔老禪によれば、無著の写本は彼の有名な平泉の光堂の經本であつたと推測している。③の「識語」は、同じく東叔が附加したものと思われ、二年後に実海的座元が郡上の天台古刹の長瀧寺に伝承された写本を捜求したが當時既に見つからなかつたと伝えている。今一本の写本も興味深い。日本達磨宗の大日能忍が開いた吹田（水田）の三宝寺に存在していたといい、

享保の頃にその寺が曹洞宗に属していたというのも興味深い。三宝寺は既に現存ないので、この寺の所蔵と伝える写本も不明と言わざるをえないであろう。<sup>(6)</sup> ただ、「凡例」や「識語」からでは、享保年間頃の伝承を確認できるだけで、「凡例」の⑩に「慈覺大師円仁（七九四—八六四）」の将来を記すが、「拈華微笑」の話の成立からいつても、全くの信頼できる内容とは思われない。<sup>(7)</sup> この問題は後に検討することにしよう。

### 三、一巻本『大梵天王問仏決疑經』の構成と内容の要旨

続藏經には、上記の『問仏決疑經』二巻に統いて、一巻本が収められている。二巻本とは異なり、一巻本には「凡例」や「識語」に相当するものは見あたらない。目次も元來の写本には存在しなかつたようで、続藏經に収めるにあたつて「新加」されている。新加された「大梵天王問仏決疑經目次」は

七品で、次のようになつてゐる。

序品第一

拈華品第二

月輪品第三

法界品第四

六大品第五

降魔品第六

往生品第七

共通する品名は二巻本の「降魔品第二十一」と一巻本の「降魔品第六」のみで、その「降魔品」は分量も二巻本に比べて一巻本が五倍あり、その内容は全く異なつてゐる。

各品の内容を二巻本と比較しながら簡単に示せば次のようになる。

序品第一

世尊が靈鷲山頂で久しうからずして般涅槃することを述べ、大衆に發問を促すが大衆は黙然として声がない。凡夫の心中には元より仏心があり、凡夫が成仏して大妙法に至るという教えを、摩訶迦葉に付すことを示唆する。

拈華品第二

大梵王が金婆羅華を如來に奉つて説法を願う。如來が拈華するも、八万四千の大衆は默然とするのみ。摩訶迦葉が破顔微笑して、正法眼藏が付囁される。その伝法は過去七仏の儀

式とする。大梵王の質問が続き、後五百歳に摩訶迦葉のみが「真道象」を伝える。正法八百年、像法千二百年、末法五千五百年、その後五百年に人間世の闇浮中のことが語られる。その後、拈華微笑の話が繰り返され、付嘱と共に摩訶迦葉の成仏の授記が与えられる。成仏は「一心性」による。八万藏經の諸教は、一心を乗せる器とする。摩訶迦葉は過去の成仏理解を否定して、「刹那成仏」を讚嘆する。大梵天王から入得と修行の方法を聞かれて、仏は「(一)心性」に依ることを明かす。大梵天王の間に對して、摩訶迦葉が得た一心の理は一切の教と同じであるという。心性の道は、在家出家共に具足していると明かす。

### 月輪品第三

月輪に朔・絃・望・晦があつても、摩訶迦葉の今日の未成仏は、未來の成仏の授記と同じでこれを「見性仏」であると云う。十五道（十波羅蜜・五智）の自己の成仏を述べ、これを「心性」とか「仏性」という。

### 法界品第四

七法界（三法身法界・五因縁法界・四氣法界・七大法界・三世間法界・四順逆法界・十界法界）を述べ、それぞれを等流・智行・成仏の三法身法界、法性・無明・逢著・執行・後会の五因縁法界、空氣・陽氣・陰氣・生氣の四氣法界、地大・水大・火大・風大・空大・識大・根大の七大法界、器界・衆

生・五蘊の三世間法界、五德・十善・四諦・六度の四順逆法界、地獄・非情・鬼界・畜生・人間・仙天・二乘・空界・菩薩・仏界の十界法界に開き、更にそれを詳説しているが、四諦・六度等省略もあり、すべての項目に亘つては説明してはいない。中でも注目すべきは、順の五德として、孝父・孝母・忠君・助聖・帰三宝とし、逆の五德として、殺父・殺母・殺君・殺聖・破三宝を挙げていて、中國的思考が見られることがある。また、この品の最後には、五十二位の修行の階位も明かされる。

### 六大品第五

七仏が空（金行、肺と属）・風（木行、肝と属）・火（火行、心と属）・水（水行、腎と属）・地（土行、脾と属）・識（空主）の六大法を説くことを明かす。転輪王が五行（木火土金水）だけを言うのは、天地のみで、諸仏如来の知っている十界人の業因報果の天外を言わないからとする。更に五大は滅するが、如來藏の識大は不滅と説いている。

### 降魔品第六

(一) 天魔常作障魔（=天魔作障魔=天鬼領氣障魔）（高智破戒報魔・持戒輕智報魔・修定著怪報魔・智戒四見報魔・依宝不法報魔・妙解無報報魔・智行慢心報魔・有智無質報魔・表學誑人報魔・長弁樂輪報魔）、(二) 外道邪見障魔（=外魔=帰氣断滅魔見・成神鬼界魔見）、(三) 粋中邪解障魔（=他魔

外道邪見魔(=釈中典会魔)（文字博学見魔・要約愚痴見魔・易

行著相見魔・難行著相見魔）、（四）知見差路障魔（=自魔）

（禪坐不得迷魔・弁達不悟迷魔・凡聖不別見魔・慮難不發見魔・  
慮易差別路魔・知見不修迷魔・能修不見迷魔・見空不中迷魔・  
見滅不實迷魔・心教不同迷魔）の四種魔を明かす。特にこの  
経が唯だ經文字章句に依らず、此の經理を以て心心に伝える  
ことが強調される。また興味深いのは、一如來・一經句・一  
菩薩を念ずる一行の易行に執着することが否定されている。

### 往生品第七

往生説は善巧にして往生を求めず普賢の大道を修行する大  
根菩薩の今生得利勝機と、無量寿仏を専念して命終後に極楽  
に往生する下根愚痴菩薩の後生得利劣機の二種の機に修行者  
を分ける。唯だ後者は劣行であり、これを勝行と誤り、他人  
に勧めることを認めることはなく、阿弥陀仏の本願心にも背  
くという。更に命終後の蓮華土と大道を行ずる時に蓮華が即  
ち開く実往生の二生を説く。亦た九品の外の一生に四輩を分  
ける。一に六度を修行する開悟発智の菩薩道人、二に漏尽の  
大阿羅漢、三に『法華經』を受持して開示悟入する人、四に  
無上神呪を受持して五智如來の五色光印を作し、光明真言を  
誦えて法身を成す人である。四種根の真言行人は、現存テキ  
ストでは欠けている。最後に極大乗法が説かれ、前の方便禪・  
中の得道禪・後の真実禪の三種の如來禪が明かされる。この

説は後に詳しく紹介する。

これらの内容の簡単な紹介からも知られるように、確かに  
「拈華微笑」の話の共通性は見られるものの両者は明らかに内  
容を異にするものと言つてよい。一巻本は決して二巻本の抜  
粋と呼ばれるようなものではない。一巻本には、かなり独自  
の法相名目が存する箇所もある。

## 四、『大梵天王問仏決疑經』の從來の研究 — 忽滑谷快天の 研究を中心として

本書の研究は、忽滑谷快天氏の「大梵天王問仏決疑經に就  
て」（『禪學批判論 附錄』明治三八年一一月一三日、鴻盟社）  
および「第二編第十七節 拈華微笑の本拠如何」（「第二十一  
節 宋濂と大梵天王問仏決疑經」（『禪學思想史 上卷』所収、  
玄黃社、大正一二年七月）に代表され、それ以後は研究され  
ないまま今日に至っている。前者の説は、「緒言」と二四項目  
で成り、各項目は詳細ではないが、概括してあるので、それ  
に基づいて概要を述べてみよう。

緒言 東大路鉄門師の写本（元来は西有穆山所蔵の写本）  
を借覧の機に真偽の考証をしたこと。<sup>(8)</sup>

第一内容。上下二五品の品名列挙（続藏經卷八七—三〇  
二左下—三〇三右上参照）。ここに忽滑谷氏が二巻本を問  
題としていることが明確になる。但し、続藏經の二巻本

は、二四品であるが、忽滑谷氏は、下巻に百字品を紹介し、全体二五品とする。

第二説時。「法華の後にして入涅槃の前」（同—三〇三右下、三〇三左上を根拠）。

第三主張。「一切の言教は皆仮説なり取るに足らず、耳口所伝の法は真の大法にはあらず」（同—三一九右下を根拠）。「世尊の拈華は釈迦牟尼仏の伝法に際しての儀式のみにあらずして過去七仏の儀式なり」（同—三二四左上?、三二四左上を根拠）。「拈華の中に八万の法藏も含まれてある」（同—三二〇左下を根拠）。

第四大小乗。大乗（同—三一六左下、三一九右上、三一九右上、三〇三左上等を根拠）。ただ、迦葉の讚嘆に特色。

第五古説。面山瑞方（一六八三～一七六九）・諦忍律師妙龍（一七〇五～八五）は日本撰述説。萬仞道坦（一六九八～一七七五）・黄泉無著（一七七五～一八三八）は王荊公のいうのは真撰、江戸の流布本は偽撰説。忽滑谷説は面山・諦忍説を支持する。この件は後に詳述する。

第六真偽。忽滑谷説の真経とは、「實際釈尊が説かれた教へ、又は其事實を弟子の迦葉等が結集して後世に伝へた経」とする。<sup>(9)</sup>

第七偽経。忽滑谷説は面山・諦忍説を支持。兩人は「日本撰述説」の理由を明記しないので、これより以下にお

いて自説を説く。

第八理由（一）。「訳人の名がない」。

第九理由（二）。「将来の祖師がない」。

第十理由（三）。「大藏中に其目録すらない」。

第十一理由（四）。「日本的の漢文」。「依て日本作の偽経」とする。

第十二理由（五）。「如來臨終の時に」「迦葉の在座は歴史的事実と撞着を来す」。

第十三理由（六）。「此經には又五時八教判釈の語があるは」（同—三〇六右下、三一六右上、三一六右下、三一六右下、三〇六右上を根拠）。「仏の在世より」あることになり、「尤も笑ふべきこと」。

第十四理由（七）。「教相を破する」「禪門の慣用語」（同—三二四左上、三一九右下、三一九右上、三一九右上、三〇九左上、三一〇左上、三一七左下、三一七左下、三一八左下を根拠）の「生也全機現。死也全機現」（同—三一〇右上を根拠）等が「用ひてある」ので、「其作者の宗旨も大概推量が出来る」。

第十五理由（八）。「支那の儒教道教などの思想を言明」（同—三〇六右上、三〇六右上を根拠）。

第十六理由（九）。「作者が後世の同体別体などの語を用ひて経文を造つた」（同—三一六左下を根拠）。

第十七理由（十）。法相宗の四分の義あり「相分、自性分

などの語を用ひて経文に編入したるは杜撰」（同—三一一

右上を根拠）。

第十八理由（十一）。『律師』という文字あり。「経中に律師といふ一団僧がある理由はない」（同—三〇七左下を根拠）。

第十九理由（十二）。「應知我諸比丘。若欲行姪、應捨法

服、著俗衣裳。然後行姪、復應生念。姪欲因縁、非我過咎。如來在世、亦有比丘、習行姪欲、得正解脱」（同—三

〇七左上を根拠）の文は、如來在世の語は「後世の人の言ふ所」。「況んや欲行姪、應捨法服、著俗衣裳といふに於てをや」。

第二十理由（十三）。空仮中のことを説く。「空仮中の名義が井然として成立したのは天台以降なること異論なからう」（同—三一九左上、三三二一左下を根拠）。

第二十一帰結。内外からの観察により、「どうも此經は日本作の偽經のやうに見える」。

第二十二拈華。「古來拈華の公案には一定の文字が確立して居らぬ」（同—三〇三左上を根拠）。拈華の時處も、「或は靈山となし、或は涅槃会上となし、或は多子塔前とする、拈華の時も或は『涅槃』と同時とし、或は『法華』の後『涅槃』の前とし、或は『阿含』の時として一も確

定せぬ」。

第二十三付法。拈華を除いて付法とすれば、『涅槃經』の説、『雜阿含』『華手經』等の分座、『舍利弗問經』『大悲經』『付法藏伝』等によることになる。「併し正法眼藏の熟字は諸大乘經にない」。

第二十四注意。「禪宗の真価は此經の真偽と少しも関係はない、拈華付法の事は宗門の面授相伝であるから経文に記してある筈はない」。「予が此論文は禪門に害を与へるものと誤解しては困る」。

以上の紹介で忽滑谷説がいかなるものであるかを、ほぼ知ることができると、先に言うように忽滑谷氏が全くふれないと問題点は、大きく二つにまとめられよう。

(1) 一巻本『大梵天王問仏決疑經』について。

(2) 一巻本と二巻本との関係について。

この問題は後述することにしたい。

## 五、面山・諦忍の日本撰述説について

忽滑谷氏の第五の古説の紹介において、その出典が論文でははつきりしないところがあるので、忽滑谷氏が基づいたものか、あるいはその後に活字化された資料の出典箇所を紹介しながら、面山瑞方・諦忍律師妙龍の日本撰述説を中心について。認していこう。忽滑谷氏は『禪學思想史』においては、朝川

鼎かなえ（一七八一—一八四九）が諦忍妙龍の説と同じことを述べるので、これについても資料を加えて紹介することにする。更に萬仞道坦・黃泉無著のいう王荊公の見た原典は真撰であるが、江戸時代の流布本は偽撰説とする説についての資料をも確認しておくことにしたい。

### （一）面山瑞方説<sup>⑩</sup>

（a）面山撰『大智禪師偈頌聞解』卷上。『続曹洞宗全書』注解二二四二一三頁。（忽滑谷も一部引用）

コノ題ハ、『結夏錄』ノ拈華瞬目ノ普説ニ、古証ヲ引テ邪計ヲ破ス。大切ナ宗門ノ妙則ヲ、中古カラ邪解スル師家多シ。総ジテ瞬目ノ二字ナキハ邪解トシルベシ。『大梵天王問仏決疑經』モ、支那ニ風説バカリ。題号ハアリテ經ハナシ。王荊公ガ見タト「宗門雜錄」ニアルモ、禪林ノ妄説ヨ。日本ニコノ經アルハ、洞家ノ僧ノ偽作ナリ。教外別伝ノアヤマリハ、『宝慶記』ニテ悉委悉スベシ。（以下略）

### （二）諦忍妙龍説<sup>⑪</sup>

（b）諦忍説。『空華隨筆』上（イ）（三三二丁左～三三二丁右）

（口）（三三二丁右）の「梵王問仏決疑經」（忽滑谷引用）の二項目。

（イ）元文年間、有一禪師。贈大梵天王問仏決疑經一卷曰、是出於閩東奧州古刹希有之物也。請師之證明。予生難遭之想、焚香繙之。其義旨膚淺、其文字倒置。殆不堪看。中古倭人之作無

疑焉。蓋中古之人、運籌於古刹之中、取信於千歲之下耳。真可悲。夫大凡支那日本黃口禪和、強求教外別伝之本拠、在筆舌兩端、昌称大梵天王問仏決疑經。其經無之故、終至作偽經是惑也。參玄之士、宜具威音王以前眼、求仏祖殘羹餕飯於東郭墦間之祭者、禪宗其頽矣。

（元文年間（一七三六～四一）に、一禪師有り。『大梵天王問仏決疑經』一卷を贈りて曰く、「是れは閩東奥州の古刹より出づる希有の物なり。請う師の証明せられんことを」。予、遭い難きの想いを生じ、香を焚いたきて之れを繙く。其の義旨は膚浅にして、其の文字は倒置し、殆ほとんど見るに堪えず。中古の倭人の作なること疑い無し。蓋し中古の人は、籌を古刹の中に運んで、信を千歳の下に取ることを。真に悲しむべし。夫れ大凡そ支那・日本の黄口の禪和は、強いて教外別伝の本拠を求め、筆舌両端に在つて、昌んに『大梵天王問仏決疑經』を称す。其の經の之れ無きが故に、終に偽經を作るに至る、是れ惑いなり。參玄の士は、宜しく威音王以前の眼を具すべし、仏祖の残羹餕飯を東郭墦間かくはんかんの祭者に求めば、禪宗其れ頽またれたり。

僧持梵本来、急擯斥支那国裏、貴団天下泰平耳。

(三) 黄泉無著説

「王荊公、泉万巻に對えて、「省中に於て親しく『大梵天王問仏決疑經』を見る」と曰うは、恰も徐市等の秦の始皇に對えて、

海中に於て親しく三神山を見る不死の薬を得て取るべしと曰

うに彷彿たり。泉万巻の聞きて疑わざるは、亦た始皇の徐市が

語を信じて疑わざるに依俙たり。大都そ拈華一段の因縁は、老

胡と老盧とは、曾て言に涉らず。馬祖・百丈・徳山・臨濟も、

亦た道著し及ばず。祖師門下は、什麼の死棺材を用いて何為

眼藏、密付於汝、汝當護持。宗門雜錄云、王荊公、問仏慧泉曰、

云、世尊、至多子塔前、命摩訶迦葉、分座令坐告言、吾以正法

眼藏、密付於汝、汝當護持。泉曰、大藏經亦不載之。公

曰、頃在翰苑、見大梵天王問仏決疑經。因閱之云、梵王詣靈山、

以金色波羅華獻仏。世尊登座、拈華示衆。人天百万、皆罔措。

獨有迦葉、破顏微笑。仏言、吾有正法眼藏、涅槃妙心、分付摩

訶迦葉ヘイ上。公曰、此經多談帝王事。所以世無識者秘之也」。

近來、面山、諦忍、并此經為偽説。唯萬仞曰、余見一本、烏焉

太多矣。可惜矣。蓋王荊公所閱者真、而近來所伝者偽乎。微瑕

失連城、吾与萬仞矣。

○正法眼藏△涅槃經三十四に云く、「諸比丘、再三に仏の

住世を請う」。仏言く、「吾れに無上の正法あり、摩訶迦葉に付

属す」。『舍利弗問經』、『大悲經』も焉に同じ。』『会元』一に云

く、「世尊、多子塔前に至りて、摩訶迦葉に命じて、座を分ち

て坐せしめて告げて言く、『吾れ正法眼藏を以て、密かに汝に

付す、汝當に護持すべし』。『宗門雜錄』に云く、「王荊公、仏ニモ亦盛ナリ。『竹窓隨筆』ニ偽經ノ弁一章アリ。披キ見ルへシ。

(d) 黄泉無著『正法眼藏涉典統貂』（『正法眼藏註解全書』卷一—二二頁）（忽滑谷引用）

○正法眼藏△涅槃經三十四云、諸比丘、再三請仏住世。仏言、吾無上正法付屬摩訶迦葉。舍利弗問經、大悲經同焉。』『会元』

云、世尊、至多子塔前、命摩訶迦葉、分座令坐告言、吾以正法

眼藏、密付於汝、汝當護持。宗門雜錄云、王荊公、問仏慧泉曰、

禪宗所謂、世尊拈華、出自何典拠。泉曰、大藏經亦不載之。公

曰、頃在翰苑、見大梵天王問仏決疑經。因閱之云、梵王詣靈山、

以金色波羅華獻仏。世尊登座、拈華示衆。人天百万、皆罔措。

獨有迦葉、破顏微笑。仏言、吾有正法眼藏、涅槃妙心、分付摩

訶迦葉ヘイ上。公曰、此經多談帝王事。所以世無識者秘之也」。

近來、面山、諦忍、并此經為偽説。唯萬仞曰、余見一本、烏焉

太多矣。可惜矣。蓋王荊公所閱者真、而近來所伝者偽乎。微瑕

失連城、吾与萬仞矣。

○正法眼藏△涅槃經三十四に云く、「諸比丘、再三に仏の

住世を請う」。仏言く、「吾れに無上の正法あり、摩訶迦葉に付

属す」。『舍利弗問經』、『大悲經』も焉に同じ。』『会元』一に云

く、「世尊、多子塔前に至りて、摩訶迦葉に命じて、座を分ち

て坐せしめて告げて言く、『吾れ正法眼藏を以て、密かに汝に

付す、汝當に護持すべし』。『宗門雜錄』に云く、「王荊公、仏ニモ亦盛ナリ。『竹窓隨筆』ニ偽經ノ弁一章アリ。披キ見ルへシ。

慧泉に問うて曰く、「禪宗の所謂る、世尊の拈華、何の典拠に

出自すや。泉曰く、『大藏經にも亦た之れを載せず』。公曰く、『頃ろ翰苑に在りて、『大梵天王問仏決疑經』を見る。因に之れを閲して云く、梵王、靈山に詣して、金色の波羅華を以て仏に献ず。世尊、座に登りて、華を拈じて衆に示す。人天の百万、皆な措くこと罔し。独り迦葉のみ有りて、破顔微笑す。仏言く、吾に正法眼藏、涅槃妙心有り、摩訶迦葉に分付す、と。』（已上）

公曰く、『此の經は多く帝王の事を談ず。所以に世に識る者無く之れを秘するなり』。近來、面山と諦忍と、此の經を弁じて偽説と為す。唯だ萬仞のみ曰く、『余は一本を見るに、烏焉はなは太だ多し。惜むべきかな。蓋し王荊公の閲する所の者は真ならん、而して近來の伝うる所の者は偽ならんや』。微瑕すら連城を失う。吾れ萬仞に与せん』。

#### （四）朝川鼎説

（e）朝川鼎（一七八一～一八四九）『善庵隨筆』卷二「拈花」（『日本隨筆大成 第一期10』所収、吉川弘文館、一九七五年九月）（忽滑谷『禪學思想史』にほぼ全文を引用）（なお、改行及びルビと訓読文は引用者）

○宋儒ノ所謂道統ハ、禪家ノ血脉ニシテ、世尊拈花迦葉微笑ヲ曾子ノ一貫ニ附会スルハ、世人ノ知ル所ナレバ、今更ニイフニ及バズ、但拈花ノコト『五燈会元』ニ出デ、一切經中ニ所見ナシトイヘドモ、古來相承ノ説ニシテ、必シモ彼徒ノ杜撰セルニハアラジ、サレド彼徒ハ諸宗皆所依ノ經アルニ、禪宗ニ限り

所依ノ經ナケレバ、胡乱ナル教ノヤフニ、人ノ疑ハンコトヲオソレテヤ、

『大梵天王問仏決疑經』ニ出ヅルナドイヘド、其經モトヨリ世ニ無レバ、嘗テ秘府ニ藏在セルヲ、王安石ハ見シトテ、『僧史稽古略』卷四ニ、「引梅溪集云、荊公謂蔣山（建康）慧泉禪師曰、世尊拈花迦葉微笑、頃在翰苑、偶見大梵天王問仏決疑經三卷、有云、梵王在靈山会上、以金色波羅華獻仏請仏説法、世尊登座、拈華示衆、人天百万、悉皆罔措、独迦葉破顔微笑、世尊曰、吾有正法眼藏、涅槃妙心、分付迦葉（梅溪集）を引きて云く、荊公、蔣山（建康）の仏慧泉禪師に謂いて曰く、世尊花を拈じ迦葉微笑す、と。頃ろ翰苑に在りて、偶たま（大梵天王問仏決疑經）三卷を見るに、梵王、靈山会上に在りて、金色の波羅華を以て仏に獻じて仏に説法を請う。世尊、座に登りて、華を拈じて衆に示すに、人天の百万、悉く皆な措くこと罔し。独り迦葉のみ破顔微笑す。世尊曰く、吾に正法眼藏、涅槃妙心有り、迦葉に分付す、と云う有り』トアリ。

〔割註〕『人天眼目』卷五ニ、引宗門雜錄云、王荊公問仏慧泉禪師云、禪家所謂世尊拈花出在何典、泉云、藏經亦不載、公曰、余頃在翰苑、偶見大梵天王問仏決疑經三卷、因閱之、經文所載甚詳、梵王至靈山、以金色波羅花獻仏、舍身為床座、請仏為衆生説法、世尊登座、拈花示衆、人天百万、悉皆罔措、独有金色頭陀、破顔微笑、世尊云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、

分付摩訶大迦葉、此經多談帝王事仏請問、所以秘藏世無聞者  
「宗門雜錄」を引きて云く、王荊公、仏慧泉禪師に問うて云く、  
禪家の所謂る世尊の拈花は何の典に出づるや。泉云く、藏經に  
も亦た載せず。公曰く、余、頃ろ翰苑に在りて、偶たま『大梵  
天王問仏決疑經』三卷を見る。因に之れを閲するに、經文に載  
する所甚だ詳し。梵王、靈山に至り、金色の波羅花を以て仏に  
献じ、身を捨てて床座と為し、仏に請うて衆生の為に説法せし  
む。世尊座に登りて、花を拈じて衆に示すに、人天の百万、悉  
く皆な措くこと罔し。独り金色の頭陀のみ有りて、破顔微笑  
す。世尊云く、吾に正法眼藏、涅槃妙心、実相無相有り、摩訶  
大迦葉に分付す、と。此の經は多く帝王の仏に事えて請問する  
ことを談ず。所以に秘藏して世に聞く者無し」と。『稽古略』  
二依テイフニ似タリ。」

余、『王梅溪集』ヲ反覆閲スルニ絶テ影響モナシ、又『山菴雜  
錄』卷下二、明善韓先生、書陸放翁普燈錄叙草後云、放翁先生  
手書普燈錄叙草、本報恩淨上人之所藏也、余故有先生遺文二  
帙、其間誤處、皆手自塗了妄、伝燈言、世尊舉華、迦葉一笑、今  
講者以為經無此事、詆其忘伝、或曰、金陵王丞相於祕省得梵王  
決疑經、閲之有此語、有所避諱、故經不入藏、今先生以為書之  
木葉旁行之間、不知即丞相之所見以否、其言如此、必有所考矣、  
併書其後云、夫二先生学広理明、其言豈妄。明善韓先生、『陸  
放翁普燈錄叙草』の後に書して云く、放翁先生の手書せる『普  
燈錄叙草』は、本と報恩淨上人の所藏する所なり、と。余、故  
に先生の遺文二帙有り、其の間の誤處、皆な手自ら塗し了れ  
り。『伝燈』に言く、世尊、華を挙げて、迦葉一笑す、と。今  
の講者は以為らく經に此の事無きと、其の妄伝なりと詆る。或  
が曰く、金陵の王丞相は祕省に於て『梵王決疑經』を得て、之  
れを閲して此の語有り。諱を避くる所有りて、故に經は藏に入  
らず、と。今ま先生以為らく之を木葉旁行の間に書すと。知ら  
ず、即ち丞相の見る所なりや以否や、と。其の言此の如し。必  
ず考うる所有らん。併びに其の後に書して云く、夫れ二先生の  
學広く理明らかなり。其の言豈に妄ならんや。」

答、唯以金剛般若、維摩經而為所依、以即心是仏而為宗、以心無所著而為業、以諸法空而以義、始自仏世、衣鉢授受、師師相承、更無異途、嗚呼、珍公何不思自語相乖哉、已言自仏世、衣鉢授受、師師相承、何還以維摩、金剛為所依乎、因諸宗各有所依、將以為禪門亦有所依乎、蓋三論者、依中百門也、法相者、

然らず。如来は飲光に命じて心印を伝え、爾來師師衣鉢授受し、以て法言と為す。何ぞ所依を求めて『金剛』『維摩』を取るに暇あらんや。若し所依有らば、仏心宗に非ず。珍公、禪宗を聴かず、諸宗を比擬し、臆度分別して、所依を出だすは、實に笑べきなり。云々ト論ゼリ。」

依楞伽、深密、及唯識也、天台者、依法華也、賢首者、依華嚴也、此諸宗依於經論者宜矣、何者、像法諸師、取經論意而立宗也、我禪門不然、如來命飲光伝心印、爾來師師衣鉢授受、以為法言、何暇求所依、而取金剛、維摩乎、若有所依、非仏心宗、珍公不聽禪宗、比擬諸宗、臆度分別、出所依者、實可笑也、云々、云々、智証大師の『教相同異』に曰く、禪宗の教相如何。答う、唯だ『金剛般若』『維摩經』を以て所依と為し、即心是仏を以て宗と為し、心の著する所無きを以て業と為し、諸法の空を以て義と為す。始めて仏世より、衣鉢授受し、師師相い承け、更に異途無し、と。嗚呼、珍公何ぞ自語の相い乖くを思はざるや。已に仏世より、衣鉢授受し、師師相い承くと言わば、何ぞ還つて『維摩』『金剛』を以て所依と為んや。諸宗の各おの所依有るに因つて、將に以て禪門に亦た所依有りと為さんや。蓋し三論は、『中』『百』『門』に依るなり。法相は、『楞伽』『深密』及び『唯識』に依るなり。天台は、『法華』に依るなり。賢首は、『華嚴』に依るなり。此の諸宗は經論に依るは宜し。何者、なんとなれば像法の諸師は、經論の意を取つて宗を立つるなり。我が禪門は

況ヤ今世ニ所伝ノ『大梵天王問仏決疑經』ハ、〔割註〕大梵天王問仏決疑經全軸二十四品、分為二本云、是陸奥國、南部花巻玉鳳山瑞興寺、無著靈光禪師所秘藏本也ト。享保十二年丁未仲夏、靈光所誌、凡例十件ヲ附シ、享保二十年乙卯閏三月、尾張國鷺頭山長寿禪寺、東澧道灘ノ後序アリ、或曰、相伝斯經所珍藏、本邦有三所、其一、奥州平泉光堂、秀衡廟処、經堂今存、其二、濃州郡上郡長滝村長滝寺天台古刹、其三、攝州水田三宝寺能忍旧跡、今為洞宗、靈光所伝者、光堂本也云、『大梵天王問仏決疑經』は全軸二十四品にして、分かちて二本に為すとしか云う。是れ陸奥國、南部の花巻玉鳳山瑞興寺の無著靈光禪師の秘藏する所の本なり、ト。享保十二年丁未仲夏、靈光の誌す所、凡例十件ヲ附シ、享保二十年乙卯閏三月、尾張國鷺頭山長寿禪寺、東澧道灘ノ後序アリ。或が曰く、相伝する斯經の珍藏する所は、本邦に三所有り。其の一は、奥州平泉の光堂、秀衡廟処なり。經堂今に存す、其の二は、濃州郡上郡長滝村長滝寺天台古刹なり、其の三は、攝州水田三宝寺能忍旧跡にして、今ま洞宗と為る。靈光の伝うる所は、光堂の本な

りとしか云うゝ文義浅薄ニシテ、西土人ノ偽作マデモナク、邦人ノ『涅槃經』ニ依<sup>テ</sup>偽造シ、台嶺慈覺大師、曾自大唐抄來、在某国某寺、ナド、附会セシニテ、信用スベカラズ。

此經ノ偽造ナルコトハ、『空華隨筆』ニ論ジアリシ歟ト覺ユ、併攷スベシ。

以上により面山瑞方、諦忍、黃泉無著、朝川鼎の主張は紹介し終えた。これらの主張はすべて二巻本の『問仏決疑經』の流布に基づいて議論が展開していることが判明する。朝川鼎の説によれば、続藏經本の「後序」は「東叔老禪」とあるところが、「享保二十年乙卯（一七三五）閏三月、尾張國鷲頭山長寿禪寺、東澧道灘<sup>〔13〕</sup>」の「後序」となっている。続藏經本より年号が新しいが、その本文内容は、明らかに無著靈光の所持本であることには変りはない。

## 六、一巻本の一特色

既に指摘したごとく、忽滑谷氏は、一巻本について検討してはいない。そのことは紹介した江戸時代の説についても同じことである。筆者はこの一巻本がどのような経過で刊行されたか、又、その所在についても知らないので、今後、できうれば新たな資料を探索して、詳細な訳註を含めて検討する予定でいる。ここでは、両巻のすべての品の内容紹介を踏まえて、その相違の一つである密教の説を一巻本の「往生品第

七」の中で具体的に示しておきたい。前述するように、続藏經に「已下佚失五百四十六字」とあるように、この品にも欠丁が認められる。その後につづく文は、如来禪の三種禪の分類であり、拈華微笑の話が明らかに禪宗教団より要請されて作成されたことは間違いないが、その禪とはいかなるものかを見る場合においても、参考になると思われる所以、この箇所を特に問題とすることにしよう。紹介する文に仮に科段を設けて、まず二章に分け、一章を更に四節、二章を二節に分け、節の中に必要と思われるところは更に項を設けて細分化し、それらの訓読を付して検討してみよう。

## 如來真実禪の科段と訓読

### 第一章 如來真実禪の勧め

#### 第一節 如來真実禪を勧める理由

薄伽梵、楞伽山中に在りて、大慧菩薩等天仙大衆の為に、極大乗法を説く。仏、阿難に告ぐ、汝等人天實に成仏せんと欲せば、當に直に如來真実禪を修すべし。<sup>〔14〕</sup>身を治め口を治め意を治めて、其の散乱する者を以て、能く自覺聖智の境界に入らしめ、無上仏身を成就せしむるなり。

#### 第二節 禪那とは何か — 三種の義

阿難よ、當に知るべし。其の禪那<sup>〔15〕</sup>とは、三種の義を以て、其の体を成就す。一には、法相法理を工夫し、邪理を解除し、

正理を証致す。二には、聖道を攝取し、心解を正し、放心を治め、道心を証得す。三には、三昧覺道の解を会感し、凡質を転じて聖果を証成す。

## 第二章 三種の如來真実禪

### 第一節 三種の如來真実禪とは何か

佛、阿難に告ぐ。是の如來禪に前の方（便）禪、中の得道

禪、後の真実禪有り。

### 第二節 前の方便禪とは何か

云何が（前の）方便禪なる。當に毘盧遮那佛の空理一道身を觀ずべきこと

云何が（前の）方便禪なる。當に毘盧遮那佛の空理一道身を觀ずべし。是れは此れ毘盧遮那如來の法性虛空体、法界身にして、一切界に遍ず。

### 第二項 前の方便禪II 大乘初門入道觀

佛、阿難に告ぐ。先ず如來の虛空体を觀ぜんと欲せば、當に自己の一切心體の無相絶離、寂滅空莫にして而も一毛の我へ我所有無きことを得るを□觀すべし。是れ一虛無佛法身なり。之を觀了りて心をして絶空真際の體と為さしめ、而も一切無動の境を得さしむ。是れを定成と為す。能く入り畢る者は、一切の煩惱を離れ、永く生死に帰すこと無し。是を前の方便禪と名づけ、亦た大乘初門入道觀と名づく。

### 第三節 中の得道禪とは何か

第一項 如來禪道の修行

佛、阿難に告ぐ。云何が中の得道禪なる。菩薩、如來法界身を觀んと欲せば、當に自己一箇の心相の、元來の妙理にして、円満せる微塵藏海にして、而も自ら自覺聖智の體を成することを觀ずべし。常・樂・我・淨の徳は、此れ五菩薩の徳有り。當に是の如來禪道を修行すべし。

### 第二項 五菩薩の徳

云何が五菩薩の徳なる。今ま過去無数の大劫を思うに、阿弥拏の阿弥拏<sup>[16]</sup>の劫前の阿僧祇の阿僧祇の劫前に於いて、阿弥拏の阿弥拏の諸仏の阿僧祇の阿僧祇の諸仏を出世せり。

其の諸仏に於いて、一の毘盧遮那佛有り。此の毘盧遮那佛の一躬の、定慧身を分けて二菩薩を成す。第一は智慧身菩薩なり。其れを名づけて應聲菩薩と曰う。是れ毘盧遮那佛の右身の分なり。第二は禪定身菩薩なり。其れを名づけて普賢菩薩と曰う。是れ毘盧遮那佛の左身の分なり。應聲菩薩は、智慧の本體に依る。理・智・悲の三體を分けて、二菩薩を成す。

元身の理法は、是れ應聲菩薩なり。右手の智慧は、是れ空藏菩薩なり。左手の慈悲は、是れ地藏菩薩なり。普賢菩薩は、禪定の本體に依る。智・行の二體に分けて、二菩薩を成す。元身の行願は、是れ普賢菩薩なり。別身の知見は、是れ文殊菩薩なり。應聲菩薩は行願に住す。西方にて東方の慈悲を主どる。普賢菩薩は慈悲に住す。東方にて西方の願を主どる。文空藏菩薩は智慧行に住す。南方にて北方の儀業を主どる。文

殊菩薩は儀業に住す。北方にて南方の智慧を主どる。地蔵菩薩は誠信に住す。中央にて四方の徳用を主どる。故に是の一菩薩は娑婆有縁の菩薩なり。此の五菩薩の法身の自体は法界に周遍す。故に等流にして而も人天衆生の五理性心を成す。

### 第三項 五理性心

#### (一) 爪迦の理性心

云何が五理性心なる。一には、爪迦の理性心なり。菩薩当に自己の元心を観すべし。一箇の大慈大悲心有り。是れ諸仏心にして、是れ諸天心なり。世間に善人有りて、是れ天地の生に順<sup>したが</sup>う人なり<sup>(世)</sup>。能く世間を饒益するは、是の人、慈悲<sup>心</sup>を生ずるが為に、是れ自然に理性を心に具するなり。諸心を束ねて愛和心を成す。諸業を束ねて撫育業を成す。是の心是れ業なり。純善心は純善業なり。世間に悪人有りて、是れ天地の生に逆<sup>さから</sup>う人なり。災厄苦害に会うも、是の人、悲心を生ずるが為に、是れ自然に理性を心に具するなり。諸心を束ねて惻憐心を成す。諸業を束ねて、救濟業を成す。是の心是れ業なり。純善心<sup>恵</sup>は純善業なり。父母に向かつて孝を成し、子僕に向かつて慧みを成すは、是の心は最上の善心なり。此の心は天の性と為す。而も万物を覆蓋し育養して、能く此の心を練熟して、常恒不变の位を成せば、是れを定成と為すなり。

#### (二) 阿施の理性心

二には、阿施の理性心なり。菩薩當に自己の心の理を観ず

べし。一箇の義理堅固心有り。是れ菩薩行にして、是れ天衆道と為す。一切世間は皆な義の正平に依りて立ち、道理に依りて利す。是の心是れ道心なり。是の理是れ道理なり。善人之に依りて利を得。義理心に利心有るにあらず。道理自ら有利有り。悪人は焉が為に剋<sup>こわむ</sup>つことを被<sup>こうむ</sup>らる。義理心に剋心有るにあらず。道理は自ら剋つと為す。是の心は君主に向かつて忠を成し、衆倫に向かつて宣を成す。此の心は天の体と為す。而も堅<sup>固</sup>同に保持して、能く此の心を練熟して、常恒不变の位を成せば、是れを定成と為すなり。

#### (三) 尸迦の理性心

三には、尸迦の理性心なり。菩薩當に自己の心の理を観すべし。一箇の敬儀節格心有り。是れ上天法にして、是れ衆聖法なり。其の体は常に不变にして、其の用は時に応ず。大天<sup>梵</sup>梵王は是の法を天に定め、金輪聖王は是の法を地に定め、諸仏は是の法を法界に定め、菩薩は是の法を人常に定む。是の心は是れ正心なり。是の法は是れ正法なり。是の心は能く世間の方法及び天地の尊卑上下の位を為す。能く此の心を縁熟して、常恒不变の位を成す。是れを定成と為すなり。

#### (四) 般若の理性心

四には、般若の理性心なり。菩薩當に自己の心の理を観すべし。一箇の智慧照明心有り。是れ諸仏の光にして、是れ諸天の明なり。世間に山原渓谷河海橋船有るも、光と明と無け

れば則ち何の行往を云わん(?)。人間に物事の是非、万法の迷悟有り。智考無ければ、則ち何の執行を云わん(?)。多大少小も皆な智慧の任なり。能く此の心を練熟して、常恒不变の位を成す。是れを定成と為すなり。

#### (五) 曇末の理性心

五には曇末の理性心なり。菩薩當に自己の心の理を観ずべし。一箇の誠信道源心有り。是れ薩埵の徳道なり。人は世間出世に依りて、此の誠信を失う。則ち一切万法は其の拠を得ること無し。上の四心は、皆な此の地を得て位と為す。能く此の心を練熟して、常恒不变の位を成す。是れを定成と為すなり。

#### 第四項 五理性心の相互關係

仏、阿難に告ぐ。所謂る釈迦の理性心とは、大慧大宥を以て事と為す。又た阿施の理性心有つて之を制して、而も釈迦

の理性心をして恣慧恣宥なることを救<sup>赦</sup>さず。阿施の理性心と

は、尤成（尤）敗を以て事と為す。又た般若の理性心を有つて之を制して、而も阿施の理性心をして恣成恣敗なることを赦さず。般若の理性心とは、広計遠識を以て事と為す。又た尸迦の理性心を有つて之を制して、而も般若の理性心をして恣計（恣）識なることを赦さず。尸迦の理性心とは、專讓専節を以て事と為す。又た曇末<sup>木</sup>の理性心を有つて之を制して、而も尸迦の理性心をして恣讓恣節なることを赦さず。曇末の

理性心とは、偏実唯同を以て事と為す。又た釈迦の理性心を有つて之を制して、而も曇末の理性心をして姿實恣同なることを赦さず。是の如く互互制詰の理有り。而も毛端の妄を赦さず。

#### 第五項 五理性心の善・宣・理・真・道

仏、阿難に告ぐ。五理性心は、其の互いに制するを得る。其の本位に居れば、本理に合して乱れず。譬如<sup>たと</sup>えば転輪聖王の城堀は、石石相い疊んで而も互いに之を制するがごとし。互いに之を詰<sup>せ</sup>めるに散乱墜落せざるを以て、而も城の形は堅固の徳あり。五理性心は、是の如く互いに制し互いに詰めるなり。過分ならしめず、不足ならしめず。是に於いて釈迦は善に居し、阿施は宣に居し、般若是理に居し、尸迦は真に居し、曇末は道に居して、而も各おの位するなり。世間は悉く之に依りて、大いに保ちて建立す。

#### 第六項 五理性心の成就

仏、阿難に告ぐ。是れ此の五理性心とは、唯だ一心なり。共に有り共に無し。唯だ其れ有れば以て其の成を為す。又た其れ無くば以て其の善を得るのみ。環の如く端無し。能く其の元体を観て、而も堅固を成す。又た其の応用にして而も成る。正しく以て物事の無量ならしむるを明かす。皆な善を致すのみ。是の如く五理性心の成就是、下品は人間に在りて、賢聖道を修して自を利し他を利し、世界をして安樂ならしめ、

衆生をして菩薩道に導かしむ。中品は神仙に入りて、菩薩道を修して、龍鬼妖魅を化して仏道に導かしめ、世界を保護す。上品は天宮に生じて、菩薩道を修して、天を保ち地を鎮め、衆生万物を利益せしむ。最上品は不定にして、或は地獄・餓鬼・畜生と交わり、或は人間・神仙・天宮に住し、或は他方の諸仏淨土に住し、身を分かつこと無量にして、形を現わすこと無数なり。而も仏道を行じて自ら利し他益するなり。

#### 第七項 一切惡心の五理性心

##### (一) 一切の惡心と五理性心

仏、阿難に告ぐ。是の如き善心は、尚お制すると詰めるとうりて真善を成すなり。況や惡心に於いてをや。一切の惡心は、皆な五理性心と為す。制すると詰めるとを被らざれば生発すること能わず。

##### (二) 惡心の二源

仏、阿難に告ぐ。惡心を生発するとは、惡事に二源有り。一には善過の源と名づけ、二には虛無の源と名づく。

##### (三) 善過の源

云何が善過の源なる。五理性心をもて、偏く一より過ぎ以て五ならざれば、並な在るなり。亦復た一一に長く過ぐるなり。五ならざれば制し詰めるなり。則ち其の仏性の理性は、無明妄氣と為る。遂て漂侵せられて妄過と為り、速かに惡心を成す。其の慈悲は、愛著心を成し、其の義理は、憎害心を

成し、其の智慧は、僕姦心を成し、其の敬儀は、詔婿心を成し、其も誠信は、偏頗頗心を成し、大いに聖道を損す。譬如えば病を療す人は、薬を服して病を治す、而るに過服すれば、以て病の薬毒に還るがごとし。

#### (四) 虚無の源

云何が虚無の源なる。五理性心を以て、常成に至らずして、而も忽ちに之を放つ。則ち其の間隙に於いて、即ち貪慾瞋恨愚惑妄想等の邪意を生ず。若し此の心生ずれば、則ち此の心は速かに惡作を成就す。身は殺害偷盜淫亂謾儀等の邪業を成し、口は悪口両舌妄語綺語等の邪言を成して、生れては人を破し、身を損し名を恥じ、子孫を亡じて、家門を滅倒す。死しては地獄餓鬼傍生修羅に落ちて、終に生死輪廻憂悲苦惱を離れること無し。汝等世々の出世の六通声聞縁覚及び世間の五通天神仙鬼等の如きは、掌中の安羅果を見るが若し。始終森羅なるが故に、委説すべからず。

#### 第七項 中の得道禪 || 大乗中中常修道觀

是の如く悉く世間の微塵を観て、一切の無惑、一切の成徳を得。位は是れ成定と為る。是れを中の得道禪と名づけ、亦た大乗中中常修道觀と名づく。

#### 第四節 後の真実禪

##### 第一項 如來の全体成仏身

体成仏身を觀んと欲せば、即ち応声菩薩の釈迦の心を以て、智禪を修し寿者相を離れて樂の徳を得。心意識の有為を尽して、無量寿仏の果に至り、妙觀察智を証し、無縁の慈悲に住す。普賢菩薩の阿施の心を以て、聖禪を修し、衆生相を離れ、常の徳を得、阿羅耶の有為を尽して、阿閦秘仏の果に至り、

大円鏡智を証し、無作の行願に住す。空藏菩薩の般若の心を以て、自禪を修し、我相を離れ、我の徳を得、我我所の有為を尽して、華開敷仏の果に至り、平等性智を証し、無得福德<sup>人相</sup>に住す。吉祥菩薩の尸迦の心を以て、覺禪を修し、相人を離れ、淨の徳を得、五根六識の有為を尽して、天鼓音仏の果に至り、成所作智を証し、無相知見に住す。地藏菩薩の曇末の心を以て、如來禪を修し、法非見を離れ、波羅の徳を得、無明惑の有為を尽して、大牟尼仏の果に至り、法界体智を証し、無漏の覚果に住す。

## 第二項 後の真実禪||大乗終室得道觀

三世諸仏は皆な此の道に依りて、因を転じて果を成し、正

覺を取りて如來・應供・正遍智・妙行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏世尊と名づく。是れを後の真実禪と名づけ、亦た大乘終室得道觀と名づく。

## 第二章 結語

### 第一節 成仏禪を修する四品

仏、阿難に告ぐ。是れ成仏禪を修する者は、下品の行者は、

初發心の時に、便ち正覺を成し、凡夫地に住して、即ち成仏を悟る。中品の行者は、三時を得成し、普賢道に入る。上品の行者は、是れを一生補所と名づく。最上品の行者は、即ち是れ三世の諸仏なり。

## 第二節 世・出世の得位

仏、阿難に告ぐ。是の如來禪を修する者は、前・中・後の位に於いて、未だ實行實証を得ずと雖も、世間の者は、人間道を治め、下品道の者は、善人位を得、中品道の者は、賢人位を得、上品道の者は、聖人位を得るなり。現に明德在るは、後に天宮に生まる。出世の者は、沙門道を治め、下品道の者は、善人位を得、中品道の者は、覺悟位を得、上品道の者は、三昧位を得るなり。現に妙異在るは、後に淨土に生まるるなり。仏は此の經を説き已りて、一切の菩薩聲聞天仙鬼、一切の人民は大いに歡喜せり。

## 大梵天王問仏決疑經

この一巻本の『問仏決疑經』の最後に相当する「如來真禪」を紹介した。まず冒頭の「如來真実禪」が、『楞伽經』に基づくことは明らかである。

復次大慧、有四種禪。云何為四。謂愚夫所行禪、觀察義禪、攀緣如禪、如來禪。云何愚夫所行禪。謂聲聞緣覺外道修行者、觀人無我性自相共相骨鎖、無常苦不淨相計著為首。如是相不異

觀。前後転進想不除滅、是名愚夫所行禪。云何觀察義禪。謂人無我自相共相外道自他俱無性已」、觀法無我彼地相義、漸次增進、是名觀察義禪。云何攀緣如禪。謂妄想二無我妄想、如實處不生妄想、是名攀緣如禪。云何如來禪。謂入如來地、行自覺聖智相三種樂住、成辦衆生不思議事、是名如來禪。

（復た次に大慧よ、四種禪有り。云何が四と為す。謂く、愚夫所行禪、觀察義禪、攀緣如禪、如來禪なり。云何が愚夫所行禪なる。謂く、声聞、緣覚、外道の修行の者は、人無我の性と自相と共相と骨鎖との、無常・苦・不淨の相の計著を觀ずるを首と為す。是の如きの相、觀を異にせず。前後転進して想、除滅せざるを、是を愚夫所行禪と名づく。云何が觀察義禪なる。謂く、人無我と自相と共相と、外道の自他俱に無性にして已りて、法無我と彼の地の相の義を觀て、漸次に増進するを、是を觀察義禪と名づく。云何が攀緣如禪なる。謂く、妄想は二無我の妄想なり。如實の處に妄想を生ぜざるを、是を攀緣如禪と名づく。云何が如來禪なる。謂く、如來地に入りて、自覺聖智の相の三種の樂に住するを得て、衆生の不思議の事を成辦するを、是を如來禪と名づく。）（大正卷一六一四九二a）

初期の禪宗教団が『楞伽經』の研究者の集団から発展したことはよく知られており、胡適がそれを「楞伽宗」と命名した。<sup>(18)</sup>その後、『楞伽經』の研究の流れから北宗が展開し、それを批判したのが他ならぬ荷沢神会（六八四—七五八）であること

もよく知られている。馬祖道一の主張もまた『楞伽經』の再解釈だと柳田聖山氏は言つてゐる<sup>(19)</sup>が、禪宗の発展は『楞伽經』を巡つてその位置づけが重要であつたことになる。有名な圭峰宗密（七八〇—八四一）の『禪源諸詮集都序』の「五種禪」の分類も『楞伽經』の四種禪を批判した神会の分類を柳田聖山氏は繼承したものと指摘している。如來禪を越える祖師禪の主張も生まれるが、禪の分類はこのように『楞伽經』の四種禪の分類と関わつてきることは確かである。<sup>(20)</sup>『問仏決疑經』に説く如來禪がこの『楞伽經』に基づいていることは、その中の「楞伽山中」とか「大慧菩薩」の固有名詞のみならず、「自覺聖智の境界」にも見事にあらわれてゐる。『楞伽經』の基本的立場が「自覺聖智の境界」と言えるものである。「自覺聖智相 (pratyātmārājñānagati-laksana)」について、『楞伽經』には次のように説いてゐる。

仏告大慧、前聖所知轉相伝授、妄想無性、菩薩摩訶薩、獨一靜處自覺觀察不由於他、離見妄想、上上昇進入如來地、是名自覺聖智相。

（仏、大慧に告ぐ。前聖の知る所を轉相伝授して、妄想無性なれば、菩薩摩訶薩は、獨一に靜處にて自覺觀察し他に由らずして、見・妄想を離れて、上上に昇進して如來地に入る、是を自覺聖智の相と名づく。）（同一四九七b）

如來禪は七卷楞伽に、「諸の衆生の為に不思議の事を作す」

(同—六〇一—a) とあるように、自利（自覺聖智の証得）がただちに利他の行でなければならぬことを主張したものである。ところが、『問仏決疑經』が如來禪を三種禪に開いたところは、その主張が明確ではない。

次にこの「如來真實禪」を「三種禪」に開いたことについて見てみよう。このような内容は二巻本には、全く見出せない。しかも、「三種禪」を説明するに当たって、密教の説が多く取り入れられている。<sup>(23)</sup>確かに五仏五智については、二巻本の「業識品」第二二にも簡単な記載が次のように見える。

諸仏之智一而一切智等者、業識之不思議靈覺智也。何以証焉者、以一切凡夫一切有識、或時正智、或時不正智、出於其不意故。謂此無性智、又謂不昧靈智、又謂諸仏無上智、又謂五仏五智、又謂四仏知之智、又謂諸正徧知覺之智也。一切所有塵塵法法、有情非情、覺知不覺知、有相無相等者、此靈覺智之相也。△諸仏の智は一にして一切智等とは、業識の不思議の靈覺智なり。何を以て焉を証すとは、一切凡夫、一切有識を以て、或る時は正智、或る時は不正智にして、其の不意より出づる故に。此の無性智を謂い、又た不昧靈智を謂い、又た諸仏無上智を謂い、又た五仏五智を謂い、又た四仏知の智を謂い、又た諸の正徧知覺の智を謂うなり。一切所有の塵塵法法、有情非情、覺知不覺知、有相無相等とは、此の靈覺智の相なり。△(同—三二一左下)二右上)

このことから知ることは、明らかに先に紹介した一巻本とこの文を比べると、一巻本が密教色の濃いことが判明する。

ところで五仏五智は、中国と日本のどちらでも説くものである。例えば、不空訳『金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論（亦名瑜伽總持釈門說菩提心觀行修行義）』の金剛界曼荼羅の三七尊の中に五仏を説いて次のようにいう。

於三十七尊中、五方仏位、各表一智。東方阿閦仏、因成大円鏡智、亦名金剛智也。南方宝生仏、由成平等性智、亦名灌頂智也。西方阿弥陀仏、由成妙觀察智、亦名蓮華智、亦名転法輪智也。北方不空成就仏、由成成所作智、亦名羯磨智也。中方毘盧遮那佛、由成法界智為本。已上四仏智出生四波羅蜜菩薩焉。四菩薩、即金寶法業也。三世一切諸聖賢、生成養育之母。於是印成法界體性中、流出四仏也。四方如來、各攝四菩薩。東方阿閦仏攝四菩薩。金剛薩埵、金剛王、金剛愛、善哉、為四菩薩也。南方宝生仏攝四菩薩。金剛寶、金剛光、金剛幢、金剛笑、為四菩薩也。西方阿彌陀仏攝四菩薩。金剛法、金剛利、金剛因、金剛語、為四菩薩也。北方不空成就仏攝四菩薩。金剛業、金剛護、金剛牙、金剛拳、為四菩薩也。四方仏各四菩薩、為十六大菩薩也。……△三十七尊中に於て、五方仏位に、各おの一智を表わす。東方阿閦仏、大円鏡智を成するに因る、亦た金剛智と名づくるなり。南方宝生仏、平等性智を成するに由り、亦た灌頂智と名づ

くるなり。西方阿弥陀仏、妙觀察智を成するに由り、亦た蓮華智と名づけ、亦た転法輪智と名づくるなり。北方不空成就仏、成所作智を成するに由り、亦た羯磨智と名づくるなり。中方毘盧遮那仏、法界智を成するに由り本と為す。已上の四仏智は四波羅蜜菩薩を出生す。四菩薩、即ち金宝法業なり。三世一切諸聖賢の、生成養育の母なり。是に於て法界体性中に印定し、四仏を流出するなり。四方如來、各おの四菩薩を攝す。東方阿閦仏は四菩薩を攝す。金剛薩埵、金剛王、金剛愛、善哉を四菩薩と為すなり。南方宝生仏は四菩薩を攝す。金剛宝、金剛光、金剛幢、金剛笑を四菩薩と為すなり。西方阿弥陀仏は四菩薩を攝す。金剛法、金剛利、金剛因、金剛語を四菩薩と為すなり。北方不空成就仏は四菩薩を攝す。金剛業、金剛護、金剛牙、金剛拳を四菩薩と為すなり。四方仏に各おの四菩薩ありて十六大菩薩と為すなり。……（大正卷三二一十五七三c～四a）

このように金剛界曼荼羅の三十七尊には、五智如来は当然説かれて來たものである。たとえば、この五智如來については、永明延寿（九〇四一九七五）の『宗鏡錄』に二ヶ所引用されている。<sup>〔24〕</sup>その卷二四には次のようにある。

且如總持教中、亦説三十七尊、皆遮那一仏所現。謂毘盧遮那如來、内心証自受用、成於五智。從四智流、言四如來。謂大円鏡智、流出東方阿閦如來。平等性智、流出南方宝生如來。妙觀察智、流出西方無量壽如來。成所作智、流出北方不空成就如來。

法界清淨智、即自當毘盧遮那如來。言三十七者、五方如來、各有四大菩薩在於左右、復成二十。謂中方毘盧遮那如來四大菩薩者、一金剛波羅蜜菩薩、二寶波羅蜜菩薩、三法波羅蜜菩薩、四羯磨波羅蜜菩薩。東方阿閦如來四菩薩者、一金剛薩埵菩薩、二金剛王菩薩、三金剛愛菩薩、四金剛善哉菩薩。南方宝生如來四菩薩者、一金剛寶、二金剛威光、三金剛幢、四金剛笑。西方無量壽如來、亦名觀自在王如來四菩薩者、一金剛法、二金剛劍、三金剛因、四金剛利。北方不空成就如來四菩薩者、一金剛業、二金剛法、三金剛藥叉、四金剛拳。已有二十五及四攝八供養、故三十七。言四攝者、即鉤・索・鎖・鈴。八供養者、即燒・散・燈・塗・華・鬘・歌・舞。皆上有金剛、下有菩薩。然此三十七尊各有種子、皆是本師智用流出。

菩薩とは、一に金剛薩埵菩薩、二に金剛王菩薩、三に金剛愛菩

平等智者。自受覺德、転我人識。成仏自己、成仏衆生。  
大圓智者。自性覺德、転含藏識。成仏自己、成仏衆生。

法界智者。法身覺德、轉無明識。成仏自己、成仏衆生。

量寿如來亦た觀自在王如來と名づくる四菩薩とは、一に金剛法、二に金剛印、三に金剛因、四に金剛判なり。七万六千成就

成仏の衆生なり。所作智とは應化賞讃はして前五譲を轉す成仏の自己

如來の四菩薩とは一は金剛拳二は金剛法三は金剛義又

仏の衆生なり。

平等智とは、自受覚徳にして、我人識を転ず。成仏の自己、成

下に菩薩有り。然して此の三十七尊に各おの種子有り、皆な是

大円智とは、自性覚徳にして、含藏識を転ず。成仏の自己、成

仏の衆生なり。

法界智とは、法身覚徳にして、無明識を転ず。成仏の自己、成

仏の衆生なり。

観は無明を転じ、法界性を成す、是れを如來法界体智と名づく

(同十三三八左下) (三三九右上)。

五智如来を五台に配して説く清涼澄觀の『演義鈔』卷七六（大正卷三六一六〇〇c）にしても同様である。その点では一巻本の『問仏決疑經』の五智如來の呼称はずいぶんとくずれた形となつてゐる。ただ、「月輪品」第三において、十波羅蜜に五智を加えた十五道は次のように示している。

所作智者。應化覺德、轉前五識。成仏自己、成仏衆生。妙觀智者。他受覺德、轉第六識。成仏自己、成仏衆生。

を作し、口に神呪光明真言<sup>(25)</sup>を誦し、自を呪え他を呪えて、即ち法身を成じ、即ち直に弥陀仏の前に生まれることを得」(同)とも説いていて、一般的な説も混在するのである。しかし、先に紹介する「後の真実禪」に本書の力点があるとすれば、やはり特殊な説と言わざるをえない。

そもそも、『問仏決疑經』が仮に『人天眼目』の説のように、南宋初期頃に成立したとする、他の論文での成立過程は検討したように、北宋代の臨済宗が創唱した説であり、または法眼宗の可能性を含めても、その内容は決して密教色を基本にすることはないと断定できよう。宋代の臨済宗とは禅宗の本流としての看話禪を形成するものである。その教学の背景が密教を主とするものであつたとは思われない。<sup>(26)</sup> 結局、一巻本も結論的には、忽滑谷氏の二巻本の説と同じであつて、これを中国において成立したとする積極的な説は筆者にはない。ここでは一巻本と二巻本は相違する内容をもつてゐること、一巻本もまた江戸時代に日本で撰述されたと現段階では考えられるという、駒澤大学仏教学会の発表をとりあえずまとめてとして、今後の研究の中間報告としておきたい。それ故に自説に固執するつもりはなく、改たむべき条件が生ずれば、改める予定でいる。

(1) 駒澤大学仏教学会の発表後に金沢文庫の高橋秀栄氏よ

り筆者未見の山岸徳平氏の論文「拈華微笑と笑拈梅花」(仏教文学研究会編『仏教文学研究(一)』所収、法藏館、一九六三年一月三〇日)と『溪嵐拾葉集』巻七八の関連資料のコピーを頂いた。ここに記して感謝申し上げたい。なお、山岸氏の論文については、後文に言う「拈華微笑の話の成立をめぐつて」の論文で同意できない旨を発表した。また、『大梵天王問仏決疑經』に関しては、偽疑經典の研究に詳しい岡部和雄氏に貴重な助言をいただき、本論文においても多く参考にさせていただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

(2) 『無門関』の主な諸注釈書の「春夕鈔」(寛永元年)、万安英種「万安抄」(寛永一四年)、幻門自雲「自雲鈔」(慶安三年)、規伯玄方「西柏鈔」(延宝三年)を承けて、平田高士訳注『無門関』(筑摩書房、一九六九年一〇月)、西村惠信訳注『無門関』(岩波文庫、一九九四年六月)や鷺阪宗演訳注『無門関』(大蔵出版、一九九五年二月)などに見られる。

(3) 石井修道「書評 西村惠信訳注『無門関』」(『花園大学文学部研究紀要』第二八号、一九九六年三月)。

(4) 「拈華微笑の話の成立をめぐつて」の論文で述べたことであるが、燈史等の「拈華微笑」の話の成立過程を考える諸資料を次に列挙しておくことにする。

① 『宝林伝』巻一「度衆付法章涅槃品第三」(八〇一年)(中文本一一七丁左)

每告弟子摩訶迦葉、吾以清淨法眼、涅槃妙心、實相無相、微妙正法、將付於汝。汝當護持。并勅阿難、副二伝化、無

令断絶。

② 『祖堂集』卷一「第七釈迦牟尼仏章」（九五二年）（I—二四）

又『涅槃經』云、尔時世尊欲涅槃時、迦葉不在衆会。仏告諸大弟子、迦葉來時、可令宣揚正法。又云、吾有清净法眼、涅槃妙心、實相無相、微妙正法、付囑於汝。汝善護持。并勅阿難、嗣二伝化、無令断絶。

③ 『宗鏡錄』卷九七（九六一年）（大正四八一九三七c）  
復告摩訶迦葉、吾有清净法眼、涅槃妙心、實相無相、微妙正法、付囑於汝。無令断絶。

④ 『景德伝燈錄』卷一「釈迦牟尼仏章」（一〇〇四年）（禪文化本一三二頁）

後告弟子摩訶迦葉、吾以清净法眼、涅槃妙心、實相無相、微妙正法、將付於汝。汝當護持。并勅阿難、副式伝化、無令断絶。

⑤ 黃龍慧南編『慈明禪師五会住持語錄』（潭州興化院語錄）

（一〇二七年序）（續藏卷一二〇一八八左下）。慈明楚円（九八六一一〇三九）

問、昔日世尊拈花、迦葉微笑。今日興化開堂、將何示徒。（以下略）

⑥ 『天聖広燈錄』（一〇三六年）（a）卷一「釈迦牟尼仏章」

（中文本一三六八頁）（b）卷二「摩訶迦葉章」（同一三六九、七〇頁）

（a）如來經行至多子塔前、命摩訶迦葉分座令坐、遂告云、吾以微妙正法眼藏、密付於汝。汝當保護伝付、将来無令断

絶。此大法眼藏、自爾為初、人囑一人、不扱凡聖。

（b）如來在靈山說法、諸天獻華。世尊持華示衆、迦葉微笑。世尊告衆曰、吾有正法眼藏、涅槃妙心。付囑摩訶迦葉。流布将来、勿令断絶。仍以金縷僧伽梨衣、付迦葉、以俟慈氏。

\* 柳田聖山『初期禪宗史書の研究』（三九三二頁。法藏館）

一九六七年五月には、「靈山會上拈華微笑の話と、多子塔前分座の説は、何れも宋初の『天聖広燈錄』の創唱で、『宗門統要』……等に發展し、拈華微笑の説は、

遂に『大梵天王問仏決疑經』の出現となるもの」とする。

⑦ 『伝法正宗記』（一〇六一年）（a）卷一「釈迦牟尼章」

（大正五一一七一七c）（b）同「評」（同一七一八b c）

（c）「同」続き。

（a）其後以化期将近。乃命摩訶迦葉曰、吾以清净法眼、涅槃妙心、實相無相、微妙正法。今付於汝。汝當護持。并勅阿難、副式伝化、無令断絶。

（b）評曰、付法於大迦葉者。其於何時、必何以而明之耶。

曰、昔涅槃會之初、如來告諸比丘曰、汝等不應作如是語。我今所有無上正法、悉已付囑摩訶迦葉。是迦葉者、當為汝等作大依止。此其明矣（見『涅槃』第二卷）。然正宗者、

蓋聖人之密相伝受、不可得必知其處與其時也。以經酌之、則『法華』先而『涅槃』後也。方說『法華』而大迦葉預焉。及『涅槃』而不在其會。吾謂付法之時、其在二經之間。

\* 忽滑谷説。この箇所を引用して、「蓋し『大梵天王問仏決疑經』の作者は此明教大師の説に合ふように作つ

たものと見える」という。

『涅槃經』卷二とは、「爾時仏告諸比丘、汝等不應作如是語。我今所有無上正法、悉以付囑摩訶迦葉。是迦葉者、當為汝等作大依止。猶如如來為諸衆生作依止處。摩訶迦葉、亦復如是。當為汝等作依止處。譬如大王多所統領。

若遊巡時悉以國事付囑大臣。如來亦爾。所有正法、亦以付囑摩訶迦葉」（大正一二一六一七bc）による。

(c) 或謂、如來於靈山會中拈花示之、而迦葉微笑。即是而付法。又曰、如來以法付大迦葉、於多子塔前。而世皆以是為伝授之實。然此未始見其所出。吾雖稍取、亦不敢果以為審也。曰、他書之端、必列七仏、而此無之。豈七仏之偈非其旧訣乎。曰、不然。夫正宗者、必以親相師承為其効也。故此断自釈迦如來已降、吾所以不復列之耳。吾考、其『宝林』『伝燈』諸家之伝記、皆祖述乎前魏支彊梁樓与東魏之那連耶舍、此二梵僧之所訣也。或其首列乎七仏之偈者、蓋亦出於支彊・耶舍之二訣耳。豈謂非旧本耶。然『宝林伝』其端不列七仏、猶吾書之意也。

(8) 『白雲守端禪師広録』卷一「舒州法華山証道禪院語錄」開堂法語（一〇六三年）（続藏卷一二〇一一〇五左上）。白雲守端（一二五一一〇七二）

師乃云、昔日靈山會上、世尊拈花、迦葉微笑。世尊道、吾正法眼藏、分付摩訶大迦葉。次第流傳、無令斷絕。（以下略）

(9) 『黃龍晦堂心和尚語錄』「室中拳古」（一〇七八年序）（続藏卷一二〇一一五左上）

挙。世尊靈山會上、拈起一枝花、迦葉微笑。世尊道、吾有正法眼藏、付囑摩訶大迦葉。師曰、直下穿過觸體、已是換却眼睛。臨危不在悚人、向甚處見釈迦老子。

(10) 『宗門統要集』卷一「釈迦文仏章」（一〇九三年）（宋版一六丁左）七丁右)

(a) 世尊昔在靈山會上拈花示衆。是時衆皆默然。唯迦葉尊者、破顏微笑。世尊云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、実相無相、微妙法門、不立文字、教外別伝。付囑摩訶迦葉。海會端云、迦葉善觀風雲別氣色。雖然如是、還覓頂門重麼。黃龍心云、直下穿過觸體、已是換却眼睛。臨危不在悚人、向甚處見釈迦老子。

(b) 世尊昔至多子塔前、命摩訶迦葉分座令坐、以僧伽梨囬之。遂告云、吾以正法眼藏、密付於汝。汝當護持、伝付将来、無令斷絕。

(11) 『建中靖國統燈錄』卷一「世尊章」（一一〇一年）（続藏卷一三六一一〇右上）

拈花普示、微笑初伝。對大衆前、印正法眼。囑行教外、別付上根。蓮目普觀、華偈親說。

(12) 晦巖智昭『人天眼目』卷五「宗門雜錄」（一一八八年）（大正四八一三三一五b）

王荊公問仏慧泉禪師云、禪家所謂世尊拈花、出在何典。泉云、藏經亦不載。公曰、余頃在翰苑、偶見『大梵天王問仏決疑經』三卷。因閱之、經文所載甚詳。梵王至靈山、以金色波羅花獻仏。舍身為床座。請仏為衆生說法。世尊登座拈花示衆。人天百万、悉皆罔措。獨有金色頭陀、破顏微笑。

世尊云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、分付摩訶迦葉。此經多談帝王事仏請問。所以秘藏世無聞者。

\* 王荊公とは、王安石（一〇二二—一〇八六）のこと。  
佐伯富『王安石』（中公文庫）の年譜によれば、翰林學士として京師に至つたのは、熙寧元年（一〇六八）の四八歳の時という。また、仏慧禪師は諱を法泉（生没年不詳）といい、雲門宗の雲居曉舜（？—一〇六四？七）の法嗣。

(13) 志磐『仏祖統紀』卷五「摩訶迦葉章」。一二六九撰。（大正四九一—一七〇c）

△『付法藏經』○『梅溪集』。荊公謂仏慧泉禪師曰、世尊拈花、出自何典。泉云、藏經所不載。公曰、頃在翰苑。偶見『大梵王問仏決疑經』三卷。有云、梵王在靈山会上、以金色波羅花、獻仏請仏說法。世尊登座、拈花示衆。人天百万、悉皆罔措。獨迦葉破顏微笑。世尊曰、吾有正法眼藏、涅槃妙心。分付迦葉。

\* 王十朋（一二二二—七二）の『梅溪先生廷試策奏議五卷、詩文前集二十卷、後集二十九卷、附錄一卷』が四部叢刊に收められているが、相当箇所は見あたらない。

(14) 『山庵雜錄』卷下。恕中無惱（一三〇九—一八六）が一七五年に撰す。（続藏卷一四八一—一八一左下）一八二右上）

明善韓（性）先生、書『陸放翁普燈錄叙草』後云、放翁先生手書『普燈錄叙草』、本報恩淨上人之所藏也。余故有先生遺文二帙、其間誤處、皆手自塗了。伝燈言、世尊拳華、

迦葉一笑。今講者以為經無此事、詆其妄伝。或云、金陵王丞相於祕省得『梵王決疑經』。閱之有此語。有所避諱、故經不入藏。今先生以為書之木葉旁行之間。不知即丞相之所見以否。其言如此。必有所考矣。併書其後云、夫二先生學廣理明。其言豈妄。近翰林宋公為余叙『応酬錄』、亦曰、予觀『大梵天王問仏決疑經』、所載拈花云々。宋公既親觀之。則此經世必有之。而或者詆以為妄。前云、有所避諱、故不入藏。斯言尽矣。

\* 宋濂（一三一〇—一八一）。著に『宋學士全集』あり。△宋濂撰『瑞巖恕中和尚語錄序』（続藏卷一二三一—四〇三右上）

余觀『大梵天王問仏決疑經』所載、梵王以金色波羅華獻仏、請為說法。仏拈華示衆。人天百万、悉皆罔措。獨金色頭陀、破顏微笑。仏云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、分付摩訶迦葉。嗚呼此非禪波羅蜜之初乎。（以下略）

(5) 曹洞宗総合研究センター研究員の桐野好覚氏が現在の住職に伺つたことを教えてもらつたものによる。

(6) 三宝寺が応仁年間（一四六七—六九）まで存在したことは、最近確認されたことである。石井修道『道元禪の成立史的研究』（大蔵出版、一九九一年八月）六二五頁以下、及び七六三頁以下参照。三宝寺と現在の状況については、原田正俊『達磨宗と攝津国三宝寺』（『日本中世の禅宗と社会』所収、吉川弘文館、一九九八年一二月）参照。『問仏決疑經』に存する享保年間の資料は貴重である。

(7) 円仁の『日本國承和五年入唐求法目録』『慈覺大師在唐

送進録』『入唐新求聖教目録』にその名はもちろん存在しないし、禅籍を多く記す円珍の目録にも存在しない。

(8) 忽滑谷氏の使用した『大梵天王問仏決疑經』は、『禪宗』一〇〇～一〇七号(明治三六、三七年)に活字化されたものと同じ内容と思われるが、残念ながら駒澤大学図書館には、

この間の雑誌は収蔵されていない。元来、その研究「大梵天王問仏決疑經に就て」も『禪宗』九九号(明治三六年)に発表されたものというが、筆者はこの論文も直接には見ていない。続蔵経本との相違が大いに問題となるが、忽滑谷氏の引用する原文と一致しないところもあり、続蔵経本には百字品がなく、全同ではないと思われる。より正確を求めるならば、できる限りその原本写本を入手したいと考えている。

(9) 以下の忽滑谷説は、『問仏決疑經』がインド撰述ではないことを主張する、つまり偽疑經典であることを主張するために論証される項目があるが、改めて取り上げるまでもない内容も含まれている。

(10) 面山には、『面山和尚結夏語録』(駒澤大学図書番号一三三一一二)七丁～一六丁左に、「無門関」の六則の批判を中心とする長文の「普說」があつて宗学の問題として発展する。その一端については、榑林皓堂「拈華付法と瑩山『伝光録』—道元禪師とそれとの対比—」(『道元禪の本流』所収、大法輪閣、一九八〇年一〇月)を参照されたい。

(11) 諦忍についての本格的な研究には、川口高風氏の学位論文『諦忍律師の研究 上下』(法藏館、一九九五年一二月)

がある。ただ、『問仏決疑經』に関する言及はその著の中に見あたらない。

(12) 「問仏決疑經」のことを調べるに当たって、岡部和雄氏にこの資料を最初に教えていただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

(13) 長寿寺については、圭室文雄編『日本名刹大辞典』(雄山閣、一九九一年八月)によると、名古屋市緑区大高町鷺津山一三に存し、もと真言宗に属し、天和二年(一六八二)に黄檗宗の寺として建立され、元禄四年(一六九一)の石梯道雲の代に臨済宗永源寺派に改めたという。東澧道灘の世代については確認してはいない。

(14) 後文で検討するように、四巻『楞伽經』を踏まえたもの。「極大乗法」とは、圭峰宗密の『禪源諸詮集都序』の「最上乘禪」を踏まえたものであろう。石井修道・小川隆『禪源諸詮集都序』の訳注研究(二二)』(『駒澤大学仏教学部研究紀要』五三号、一九九五年三月)五五頁以下参照。

今時、人有りて但だ真性のみを目づけて禪と為すは、是れ理行の旨に達せず、又た華<sup>カ</sup>の音を弁ぜざるなり。然れども亦た真性を離れて外に別に禪の体有るに非ず。但だ衆生は真を迷いて塵に合するを即ち散乱と名づけ、塵に背きて真に合するをこそ方に禪定と名づくるのみ。若し直に本性を論ぜば、則ち真にも非ず妄にも非ず、背くことも無く合することも無く、定も無く亂も無し、誰か禪と言わんや。況んや此の真性は唯<sup>た</sup>只是れ禪門の源なるのみに非ず、亦た是れ万法の源なるをや。故に法性と名づく。亦た是れ衆生の迷惑

の源なり、故に如來藏識と名づく『楞伽經』に出づく、亦是れ諸仏万徳の源なり、故に仏性と名づく『涅槃經』に出づく、亦是れ菩薩万行の源なり、故に心地と名づく『梵網經』心地法門品に云く、「是れ諸仏の本源なり、菩薩道を行ずるの根本なり、是れ大衆諸仏子の根本なり」とく、万行は六波羅蜜を出でず、禅は但だ是れ六中の一なるのみにして、其の第五に当たる。豈に都て真性を目づけて一の禅行のみと為すべけんや。

然れども禅定の一行為最も神妙なりて、能く性上の無漏の智慧を発起す。一切の妙用、万行万徳、乃至し神通光明も皆な定より發す。故に三乗の学人の聖道を求めるに欲するにも、必ず須らく禅を修すべし。此れを離れて門無く、此れを離れて路無し。念佛して淨土に生ぜんことを求むるに至つても、亦た須らく十六觀禪、及び念佛三昧、般舟三昧等を修すべし。

又た真性は即ち垢つかず淨からず、凡と聖とに差無きも、禪門には則ち浅有り深有りて、階級、等を殊にす。○謂く異計を帶びて、上を欣び下を厭いて修するは、是れ外道禪なり。○正しく因果を信するも、亦た欣厭を以て修するは、是れ凡夫禪なり。○我空偏眞の理を悟りて修するは、是れ小乗禪なり。○我法二空の所顯の眞理を悟りて修するは、是れ大乗禪なり（上の四類は皆な四色四空の異り有るなり）。

○若し自心の本来清浄にして元より煩惱無く、無漏智性の本自より具足し、此の心の即ち仏にして、畢竟異なること無きを頓悟し、此の如く修せば、是れ最上乘禪なり。亦た如

来清浄禪とも名づけ、亦た一行三昧とも名づけ、亦た真如三昧とも名づく。此れは是れ一切三昧の根本なり。若し能く念念に修習すれば、自然に漸に百千の三昧を得ん。達磨の門下の展轉して相い伝うるものは、是れ此の禪なり。達磨未だ到らざる已前、古來の諸家の解するところのものは、皆な是れ前の四禪八定にして、諸々の高僧は之れを修して、皆な功用を得たりき。南岳・天台は三諦の理に依りて、三止三觀を修せしめ、教義最も円妙なりと雖も、然れども其の門戸に趣入する次第は、亦た只だ是れ前來の諸禪の行相なるのみ。唯だ達磨の伝えし所のみは、頓に仏体に同じくして迴<sup>はる</sup>かに諸門に異なる。

ただ、「如來真実禪」の用例は、經典や中國禪籍では未檢。（15）同じく『都序』の冒頭を踏まえたものか。同論文五二頁以下参照。

禪とは是れ天竺の語、具さには禪那と云い、此には思惟修と云い、亦た靜慮とも云う。皆な定慧の通称なり。源とは是れ一切衆生の本覺眞性なり。亦た仏性とも名づけ、亦た心地とも名づく。之れを悟るを慧と名づけ、之れを修とするを定と名づけ、定慧を通称して禪と為す。此の性は是れ禪の本源なり、故に禪源と云う。亦は禪那理行と名づくるは、此の本源は是れ禪の理、情を忘じて之れに契うは是れ禪の行なり、故に理行と云う。

然るに今ま集むる所の諸家の述作は、禪理を談ずること多く、禪行を説くこと少し。故に且らく禪源を以て之れに題するなり。

ただ、「法相法理」や「三昧覺道」の用例は、經典や中国禪籍では未検。

(16) 阿弥拏の阿弥拏は、数の「阿彌多」か「阿芻婆」等の音写語であろうが不明。『塵添鑑囊鈔』卷一三一三一項参照。

(17) 「問仏決疑經」のこの箇所において五理性心は重要な説であるが、この用例は、經典や中国禪籍や中国密教では、索引等において未検である。「理性」については言密より台密において問題にされるようであるが、それでも「五理性心」の説は見当たらない。以下の密教の説に関しては、目下、筆者の研究が及んでいないので、今後の検討とし、先学のご指導を仰ぎたい。

(18) 胡適「楞伽宗考」(姜義華主編『胡適學術文集』所収、

九四頁以下、中華書局、一九九七年一二月)及び古賀英彦「楞伽宗雜考」(『北朝隋唐中國佛教思想史』所収、法藏館、二〇〇〇年二月)参照。

(19) 柳田聖山『語録の歴史』(『東方學報』五七冊所収、一九八五年三月)二四八頁以下参照。

(20) 柳田聖山『初期禪宗史書の研究』(法藏館、一九六七年五月)二一七頁以下参照。

(21) 同書二一三頁以下参照。

(22) 高崎直道『楞伽經』(大藏出版、一九八〇年一月)を以下多く参照した。

(23) 五智如來については、千葉正氏に多くの助言をいたしましたが、今回の論文にはすべてに亘つて検討できずに終わつたので、今後に取り上げてみたい。

(24) 「問仏決疑經」が先に三宝寺に伝承されているとの「識語」を紹介した。日本達磨宗の開祖の大日能忍が、『宗鏡錄』に精通していたことは近年明らかにされてきたことである。先の注(6)に引く拙著参照。そこにも述べておいたが、「一心」を強調する『宗鏡錄』において、その受け取り方が悪しき面に流れれば、自然外道あるいは大乗空見の徒となり、「問仏決疑經」にもその密教化において共通するものが出てくる。道元門下の主要なメンバーが元日本達磨宗の出身者で占められ、道元がその克服に生涯苦心したことなどが知られている。『問仏決疑經』が曹洞宗の僧の手になるという説を肯うならば、その説は道元の唾棄した説と共通する構造をもつことになろう。

(25) 神呪光明真言とは、菩提流志訳『不空羈索神變真言經』卷二八「灌頂真言成就品」第六八の「不空大灌頂光真言」をいい、真言・天台のみならず、禅宗においても読誦される。「唵、阿慕伽、廃嚕者娜、摩訶訥捺囉、摩拏、鉢頭麼、入嚕」(大正卷二〇一三八四C)といふ。摩訥捺囉(maha mune)は、大印と訳され、五色光の印であり、大日如來のこの印により、生仏不一と印可して、一切衆生を菩薩の大道に入らしむるものというのである。『密教大辭典』(法藏館、一九三一年九月)卷二一五八〇頁参照。現在の曹洞宗の『日課聖典』の中に「甘露門」があり、その中に「諸仏光明真言灌頂陀羅尼」として諷誦している。その元は面山瑞方の編になるという。

(26) 大慧の看話禪成立については、いくつかの論文を発表

したが、ここではとりあえず『禪語錄』（中央公論社、一九九二年一月）の「解説」を参照されたい。

(27) 「決疑」の語について、岡部和雄氏から疑偽經典の『像法決疑經』と関連して考へてもよいのではないかとの指摘を受けた。その場合、『宗鏡錄』卷一（大正四八一四一七b）の冒頭こそ「決疑」の問題であることは参考となるう。

### 宗鏡錄卷第一。標宗章第一。

詳夫祖標禪理、伝默契之正宗、仏演教門、立詮下之大旨、則前賢所稟、後學有帰。是以先列標宗章、為有疑故問、以決疑故答。因問而疑情得啓。因答而妙解潛生。謂此円宗難信難解、是第一之說、備最上之機。若不仮立言詮、無以蕩其情執。因指得月。不無方便之門、獲兔忘第。自合天真之道。次立問答章、但以時當末代罕遇大機、觀淺心浮根微智劣。雖知宗旨有所歸、問答決疑漸消惑障。欲堅信力、須仮證明。廣引祖佛之誠言、密契円常之大道。遍採經論之要旨、円成決定之真心。後陳引証章。以此三章、通為一觀、搜羅該括、備盡於茲矣。

〔つまびらか〕にすれば夫れ、祖は禪理を標あらわして、默契の正宗を伝え、仏は教門を演べて、詮下の大旨を立つ、則ち前賢の所稟にして、後學の帰する有り。是を以て先に標宗章を列し、疑を有つが為に故に問い、疑を決するを以ての故に答う。問に因りて疑情の啓くを得。答に因りて妙解潛かに生ず。謂く、此の円宗は難信難解にして、是れ第一の説にして、最上の機に備う。若し仮に言詮を立てずんば、以て其の情執を蕩かす無し。指に因りて月を得るは、方便の門の無きにあらず、兎

を獲て罷を忘るるは、自ら天真の道に合す。次に問答章を立て、但だ時の末代の大機に遇うこと罕れるに当たつて、観浅心浮、根微智劣を以て、宗旨の的かに帰する所を有るを知つて、問答決疑漸く惑障を消すと雖も、信力を堅めんと欲せば、須く証明を仮るべし。広く祖仏の誠言を引いて、密に円常の大道に契う。遍く經論の要旨を採り、円に決定の真心を成す。後に引証章を陳ぶ。此の三章を以て、通じて一觀と為し、搜羅該括して、備さに茲に尽せり。